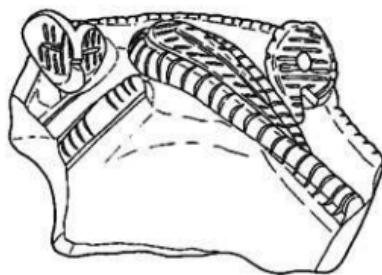


小坂遺跡

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書

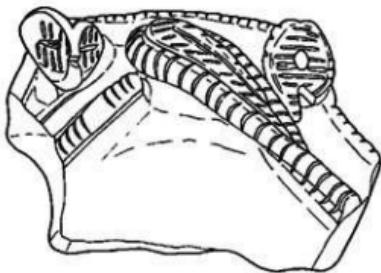


1991. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

小坂遺跡

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書



1991. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

序

本報告書は、八ヶ岳広域農道建設に先立ち、1990年度に発掘調査された山梨県北巨摩郡大泉村谷戸地内の小坂遺跡について、その成果をまとめたものであります。

本遺跡の位置する八ヶ岳南麓の広大な裾野には、先土器時代以来の遺跡が數多く分布し、遺跡の宝庫として知られております。八ヶ岳広域農道建設事業は、小淵沢町から長坂町、大泉村を経て須玉町に至る長大な計画であり、当埋蔵文化財センターでは1986年度と1988年度に国庫補助事業として試掘調査及び分布調査を行い、八ヶ岳広域農道予定地内の遺跡分布の確認作業を進めてまいりました。これまでに須玉町西川遺跡をはじめ、高根町妻ノ神遺跡、長坂町中込遺跡の発掘調査を八ヶ岳広域農道建設工事に先立って行い、注目すべき遺跡や遺物を数多く発見することができました。

小坂遺跡は、1988年度の試掘調査で確認された遺跡であります。周辺には、圃場整備事業で確認され国史跡に指定された金生遺跡や甲斐源氏逸見清光の居城とされている谷戸城などがあります。調査は幅約30m・長さ約62mの範囲で行われました。その結果、縄文時代の住居址3軒、土坑23基が確認され、遺物としては、縄文時代中期の土器群と多量の黒曜石が検出されました。土器群は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期にほぼ限定しており比較資料として良好なものであります。また、質量ともに卓越するのは黒曜石の石礫・石錐・石匙等の製品及びチップ・フレイク類であり、本遺跡が石器製作にかかわるものであることがうかがわれます。以上のとおり、小坂遺跡では縄文時代中期の集落を主体とする遺跡であり、当時期における八ヶ岳南麓の様相を考察する上で貴重な資料が得られ注目されます。本報告書が、八ヶ岳南麓の縄文時代中期の集落の存在形態を究明する一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1991年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字小坂に所在する小坂（こさか）遺跡の報告書である。
2. 本調査は、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金をうけて、山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。
4. 本書の編集および執筆は浅利司と保坂和博が行った。
5. 出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
6. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々から特に多大なご協力をいただいた。
心より謝意を表する。（敬称略）

伊藤公明（大泉村教育委員会）、桜井真貴（長坂町教育委員会）、矢島正純（狭北土地改良事務所）、河西学（帝京大学山梨文化財研究所）

凡　　例

1. 図版縮尺は原則として下記に統一した。
遺構……住居址：1／60　　遺物出土状況微細図：1／20
土坑：1／40　　遺物出土状況微細図：1／20
遺物……土器：1／3（拓影図），1／4（実測図）　　石器：2／3，1／3
土製品：1／2　　金属器：1／2
＊この他やむを得ず一部の縮尺をえたものもある。スケールを参考にされたい。
2. 遺構No・遺物Noは新番号を付した。現場で付した番号と異なるのは遺構では23号土坑（旧1号小穴）のみである。遺物は現場ではすべて通し番号を付した。コンピューター処理に用いた番号はこの通し番号である。
3. チップは長辺が10mm未満のものとし、それ以上のものをフレイクとした。
4. 土器の断面図でスクリーントーンが入っているものは纖維を含むものである。
5. 遺構図は原則的に天を北方向とし、方位の統一を図った。
6. 遺構図中のスクリーントーンは焼土範囲を示す。
7. 遺物分布図中では以下のドットマークを使用した。（ただし、42図を除く。）

□	縄文時代中期初頭土器	○	纖維含有土器
●	黒曜石チップ	△	黒曜石フレイク
◆	黒曜石原石	◇	二ヶ所以上の打点を持つもの（石核）
▲	石鐵	×	ユースト・フレイク
▲	打製石斧	▼	石錐
★	耳飾り	■	その他の石器

目 次

序文	
例言	
第1章 調査の経過と組織	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第2章 遺跡の概要	2
第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
第2節 発掘の方法と遺跡の層序	4
第3章 遺構と遺物	8
第1節 縄文時代の遺構と遺物	8
1. 住居址	8
2. 土 坑	23
3. 遺構外出土の遺物	32
第2節 縄文時代以降の遺物	43
第4章 調査の成果と課題	44
写真図版	47

挿 図 目 次

第1図 小坂遺跡位置および周辺遺跡分布図	2	第22図 土坑（2）	25
第2図 小坂遺跡周辺地形図	3	第23図 土坑（3）	26
第3図 北壁土層図	5	第24図 土坑（4）	27
第4図 全体図	6	第25図 土坑（5）	28
第5図 遺物全点ドット図	7	第26図 土坑（6）	29
第6図 1号住居址	9	第27図 土坑出土土器（1）	30
第7図 1号住居址遺物ドット図	10	第28図 土坑出土土器（2）	31
第8図 1号住居址出土土器	11	第29図 土坑出土石器（1）	31
第9図 1号住居址出土石器	12	第30図 土坑出土石器（2）	32
第10図 2号住居址	13	第31図 グリッド出土土器（1）	33
第11図 2号住居址遺物ドット図	14	第32図 グリッド出土土器（2）	34
第12図 2号住居址出土土器（1）	16	第33図 グリッド出土土器（3）	35
第13図 2号住居址出土土器（2）	17	第34図 グリッド出土土器（4）	37
第14図 2号住居址出土石器（1）	17	第35図 グリッド出土土器（5）	38
第15図 2号住居址出土石器（2）	18	第36図 グリッド出土石器（1）	39
第16図 3号住居址	19	第37図 グリッド出土石器（2）	40
第17図 3号住居址遺物ドット図	20	第38図 グリッド出土石器（3）	41
第18図 3号住居址出土土器（1）	21	第39図 グリッド出土石器（4）	42
第19図 3号住居址出土土器（2）	22	第40図 瓢状耳飾り	43
第20図 3号住居址出土石器	22	第41図 縄文時代以降の遺物	43
第21図 土坑（1）	24	第42図 石器種別出土状況	46

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査経過

八ヶ岳広域農道建設にともない、県教育委員会では文化庁の補助金を受け分布調査、試掘調査を行ってきた。本遺跡は平成元年度の試掘調査で確認されたものであった。調査面積は2000m²。調査費用は、文化庁と農林水産省との覚え書きに基づいて算出し、平成2年度当初予算に計上した。本遺跡の調査経過は下記のとおりである。

- 平成2年5月8日 発掘通知を文化庁長官に提出
5月14日 発掘調査開始
8月31日 発掘調査終了
9月5日 埋蔵文化財の発見届けを長坂警察署に提出
平成3年1月 整理作業開始

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 浅利司、保坂和博

発掘作業員 八巻久子、浅川日出子、井富保仁、浅川虎男、浅川たみ子、浅川三千代、
浅川茂子、千野松代、滝田武子、平嶋弘子、日向けさみ、山本米子、
八巻重子、鈴木はる美、小宮山きよ子、小池けさち、浅川よし子、
小池きよじ、丸茂善茂、浅川久代、細田綱代、三井種子、浅川達子、
進藤きくえ、相吉よし江、三井みつ江、秋山松義、秋山半蔵、小澤三七子
浅川喜恵、日向一子、小澤福子、守屋敏子、須賀富雄、小林光子、
丸茂光子、浅川志ずか、藤森かねよ、藤森ます子、藤森佐喜子、
藤森さち子、齊藤かずみ

整理作業員 平重蔵、平真寿美、長田くみ子、望月和佳子、野中はるみ、伊藤順子、
保坂典子、若林初美、五味節子、渡辺征子、名取洋子、伊林佳子

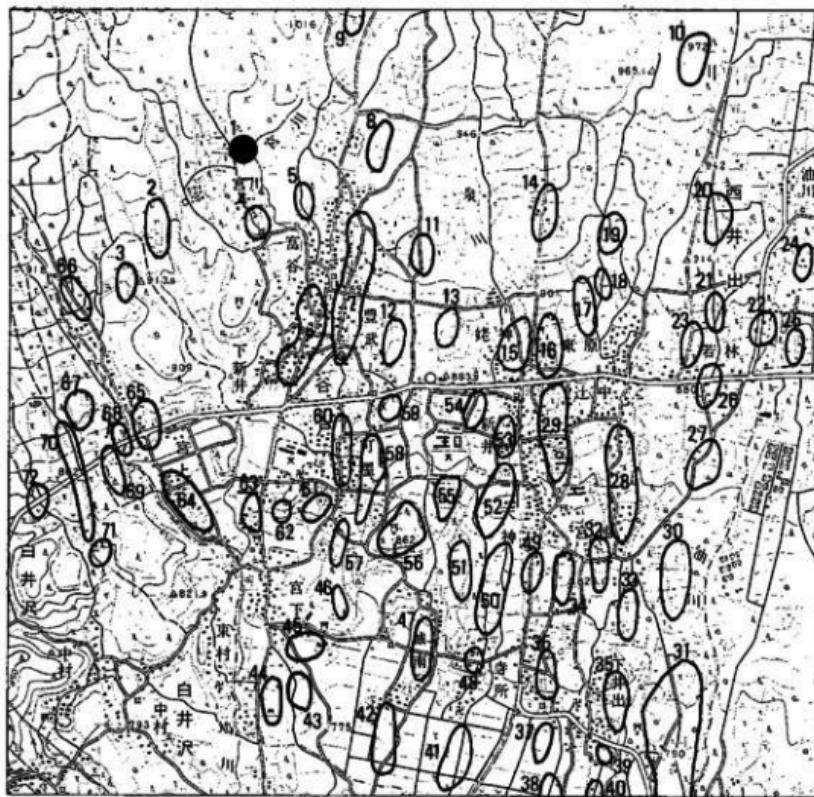
協力機関 大泉村教育委員会

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡

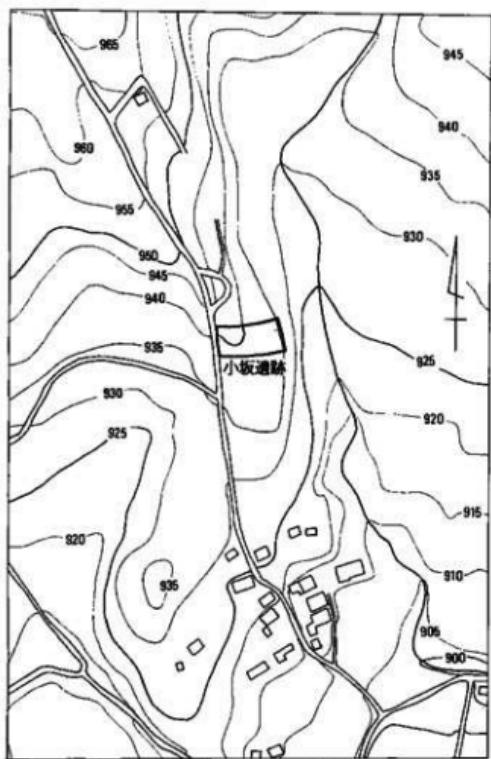
1. 遺跡の立地

小坂遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸小坂に所在する。標高は約950mである。この付近は八ヶ岳の東南麓に位置し、なだらかな裾野の多くは松や落葉松などに覆われている。このよ



第1図 小坂遺跡および周辺遺跡分布図（国土地理院発行1/25000地形図使用）

- 1 小坂 2 米山第二 3 米山第一 4 富士見 5 林崎 6 下新居 7 豊武 8 大和田 9 西原敷 10 苗敷沢
11 方城第一 12 方城第二 13 方城第三 14 小若清水 15 雄神 16 露能神 17 東原第一 18 東原第二
19 東原第三 20 油川第一 21 若林第一 22 若林第三 23 若林第二 24 油川第二 25 油川第三 26 古林第一
27 古林第二 28 富地第一 29 辻 30 古林第三 31 和田(甲・原) 32 富地第二 33 宮地第三 34 宮地第四
35 下井出 36 清水 37 原田第二 38 原田 39 下井出廬塚 40 甲 41 寺所 42 金生 43 豆生田第一
44 豆生田第二 45 豆生田第三 46 前林山十三塚 47 城下第二 48 寺所廬塚 49 天神(A,B地区) 50 山崎第一
51 山崎第二 52 天神(C地区) 53 新井 54 城上第二 55 城上第一 56 谷戸城 57 御所 58 町屋第一
59 町屋第三 60 町屋第二 61 路所第二 62 谷戸氏屋敷 63 西田 64 吉指 65 大芦 66 米山第三 67 稲屋敷北
68 稲屋敷東 69 稲屋敷 70 牛久保 71 牛久保南 72 沢入



第2図 小坂遺跡周辺地形図

て形づくられたとされている。これを基盤としていくつかの礫層とロームがこれにのり、さらに寝食をうけて現在の地形が形成されている。したがって斜面には、南北にのびる尾根部（舌状に伸びた台地）と谷部が存在する。谷部の多くは水田として利用され、尾根部はほとんど山林となっている。小坂遺跡はこの尾根上の、南端から約500m北の部分に立地する。当地域はまた、非常に湧水の豊富な場所として知られており、小坂遺跡の1～2km北側には、現在も飲料水や灌漑用水として利用されている「大湧水」や「三分一湧水」、「八術門湧水」などがある。この湧水に端を発した鳩川・甲川・深沢川等の河川が、八ヶ岳南麓をいく筋も深い谷を刻みながら南下し、合流を繰り返しやがて釜無川（富士川）へと注いでいる。小坂遺跡の東にも、これらの河川のひとつである宮川が流れている。宮川は小坂遺跡を切るかのように、比高差8mほどの急なV字谷を形成しており、遺跡面からは非常に深い谷に感じられる。

小坂遺跡の立地する尾根部は、南にむかって緩やかに傾斜しているほか、宮川に切られている東端から西にむかってもごく緩やかに傾斜している。約60mほどいった部分からやや急な傾斜となり、浅い谷を形成している。尾根の幅（東西）は約300mほどである。尾根上とはいえ比較的広い平坦面であると言えよう。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

八ヶ岳の山麓に非常に多くの遺跡が存在することは、考古学史上もよく知られるところである。山梨県側の東南麓においても、1000mの標高にもかかわらず、先土器時代から多くの遺跡が存在する。隣接する高根町では丘の公園建設にともない先土器時代の大規模な遺跡群が確認されている。しかし、圧倒的に遺跡数が増加するのは、これにつづく縄文時代である。特に中期にはその数はピークに達し、大泉村内で現在までに確認されている遺跡だけでも40ヶ所を超

えている。甲ヶ原遺跡（31）や姥神遺跡（15）などがこの時期を代表する遺跡である。また、当小坂遺跡とほぼ同時期（縄文時代中期初頭）の遺跡としては、前期からつづく大集落遺跡である天神遺跡（49・52）があり、中期初頭の住居址が8基発見されている。後期から晩期にかけて遺跡数は減少するものの、金生遺跡（42）のような大規模な祭祀遺跡も存在しており、引き続き人々の生活が営まれていたことが窺える。弥生時代・古墳時代にはいると当地の生活の痕跡は非常に乏しくなるが、平安時代には再び遺跡数が急増する。非常に短期間に集落が増加することや、この時期に、当地に牧が存在する可能性を示す記述もみられるところから、政治的・組織的な開発を想定する研究者も多い。当期の遺跡としては寺所遺跡（41）・東原遺跡（17）などがあげられる。中世に入ても、多少増減はあるものの遺跡数が多い。「流れ山」上に築かれた谷戸城址（56）や、金生遺跡（42）、深草館址（岡城外）などが中世の遺跡としてあげられる。この地域は甲斐源氏との関連が深い地域とされており、これらとの関連も含めて今後の調査・研究が期待されるところである。

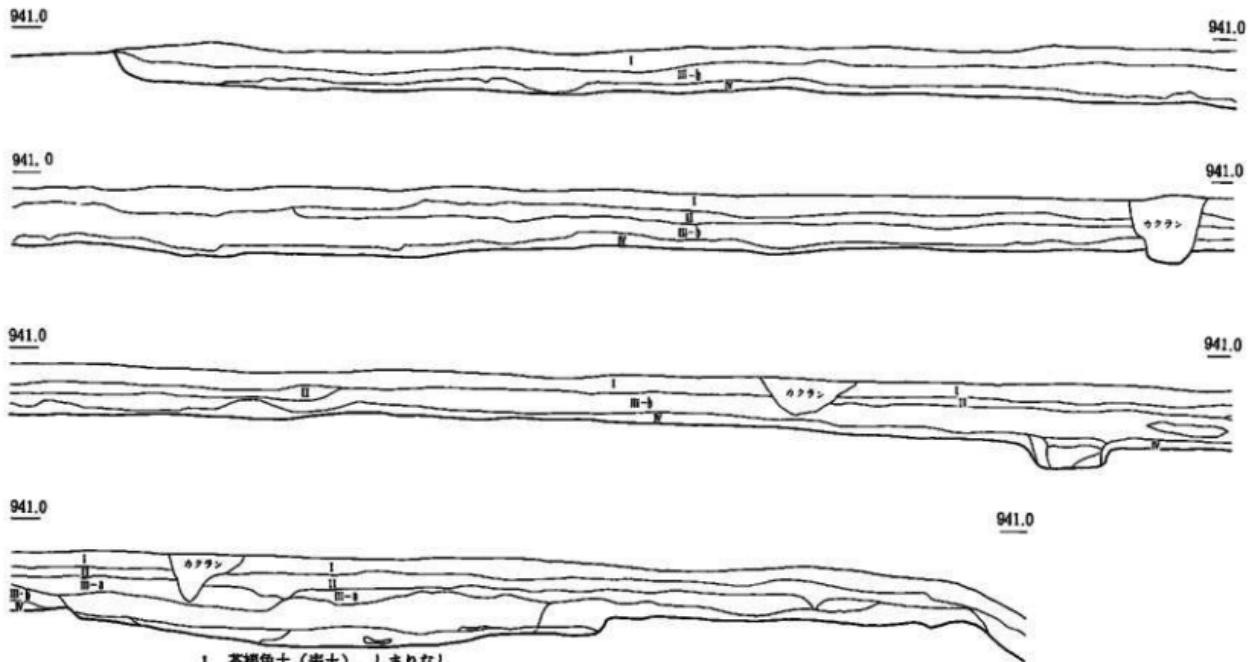
第2節 発掘の方法と遺跡の層序

1. 発掘の方法

発掘区の設定は第2図に示した。道路建設予定ではこの部分は深い切り通しになるため、30mあまりの幅員となった。昨年度の試掘調査で東西方向の遺跡分布範囲は60mと確認された。排水の関係から調査区を南北に2分し、まず北側のA区から調査を開始した。表土20~30cmを重機により排除し、4m四方のグリッドを設定した。グリッドは中央から北に向ってA・B・C・Dとし、東へ向って0~15とした（第4図参照）。A区の調査が終了したのち、重機により土を反転し南区（B区）の調査を行った。B区では南に向ってE・F・G・Hのグリッドを設定し、東に向ってはA区と同様に0~15のグリッドを設定した。B区の調査の後、東を流れる宮川沿いの部分に幅2m長さ3~4mほどのトレンチを4本入れた。本来ならばこの部分も全面的に調査すべきであったが、谷が急峻であり非常に危険をともなうため、トレンチ調査にせざるを得なかった。尚、1号住居・3号住居は発掘区を拡張して調査した。遺物については、光波測量機・コンピュータを導入して全点について3次元的に登録し、これをもとに整理作業をすすめた。

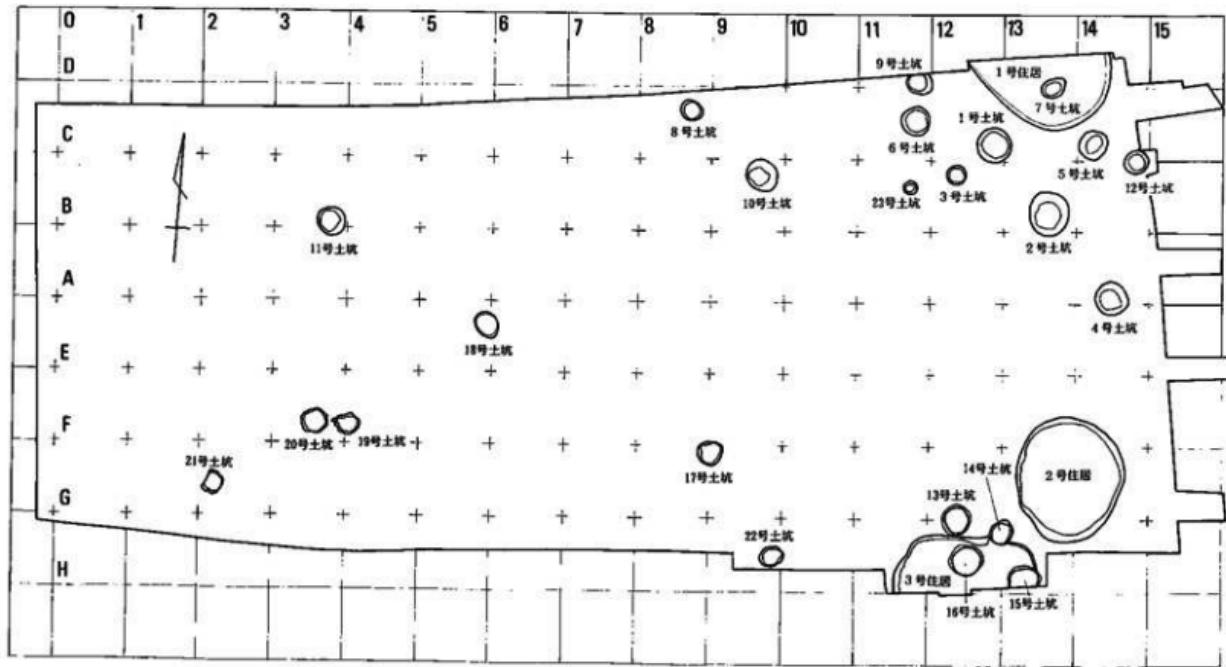
2. 遺跡の層序

発掘区の北側断面の層序を第3図に示した。東壁と南壁のものも示すべきであるが、紙面の関係上割愛した。層序は基本的には4層に分類できる。上から表土（I）、黒褐色土（II）、茶褐色土（III）、ロームを多く含む漸移層（IV）である。発掘区の東側等の厚い堆積の部分では黒褐色土の下部に黑色土が入る場合もある。遺物がもっとも多く出土した層は、茶褐色土層であった。遺構の確認はこの層の下部で行った。

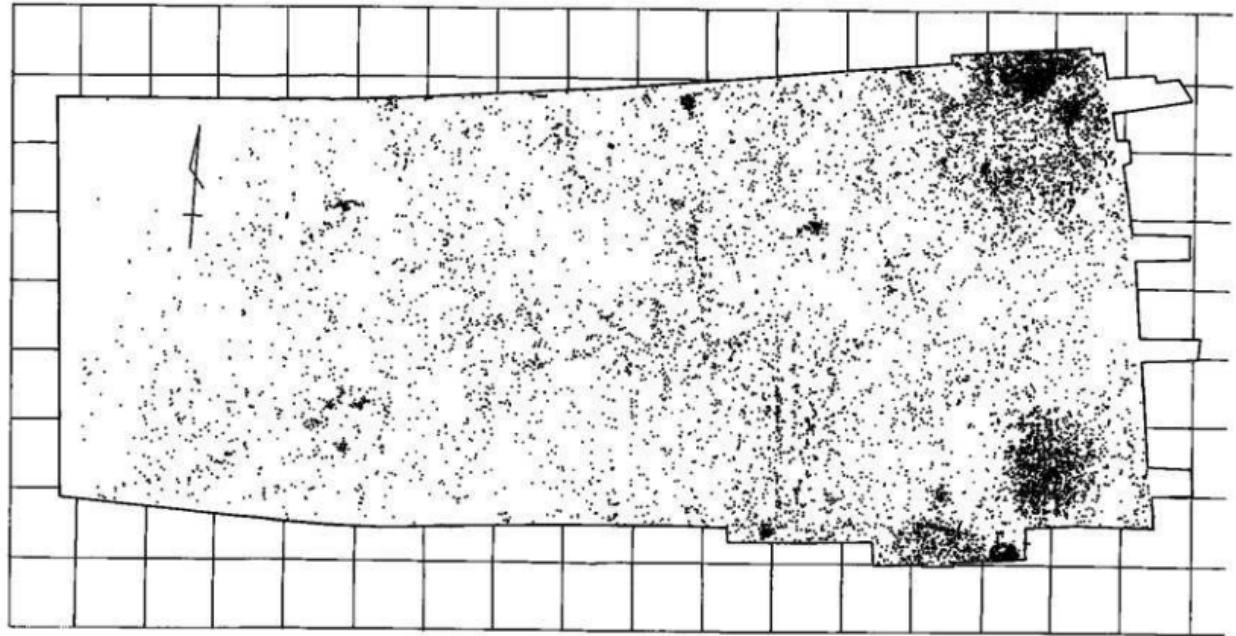


1. 茶褐色土(表土)。しまりなし
2. 黒色土。ロームブロック小量含む。
- 3-a. 黄褐色土。ロームブロック含む。
- 3-b. 褐色土。ローム粒子含む。カーボン少量化む。
4. 黄色土+褐色土。ロームへの漸移層。ロームブロックとローム粒子多く含む。

第3図 北楚土層図(1/80)



第4図 遺構全体図 (1/200)



第5図 遺物全点ドット図

第3章 遺構と遺物

第1節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址

(位置) A区13・14・15-C・Dグリッドに位置する。住居址中央部やや南側で7号土坑と重複関係にあり、本住居址が切る。

(形状・規模) 住居規模は東西5.8m、南北推定8.0mであるが、北側は発掘区外へ伸びているため正確な規模をつかむことができない。平面形は南北に長い楕円形と推定される。

(床面・壁) 床面は凹凸が見られるが、良く踏み固められている。覆土には多くの焼土、炭化物が認められる。周溝及び埋甕はない。壁は北西、北東壁がわずかに検出されたのみで、壁高は約20cmを測る。

(炉) 炉は住居址中央に位置し地床炉であり、瓢箪型(南北方向)に二つに分かれている。北側の炉の掘り方は径36cmの円形で、深さは15cm、南側は径30cmの円形で、深さは15cmである。

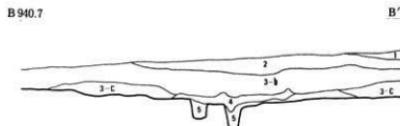
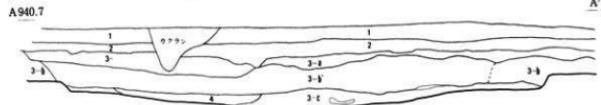
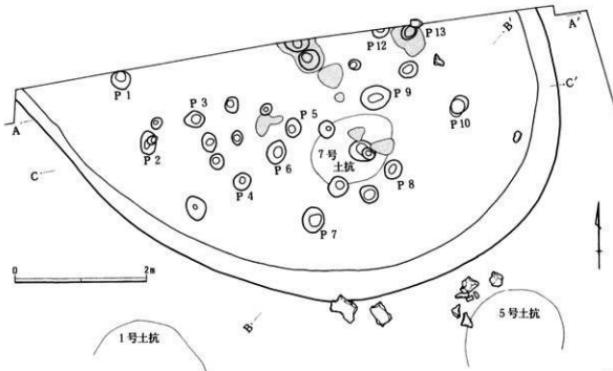
(その他の施設) 本住居址に確実に伴うと思われるピットは13個であるが、北壁よりも4本の存在が想定される。これらの内、壁際に存在するものが柱穴と考えられ、ピット1・4・8・10の4本と判断される。30cmの円形を呈するものが主体を占め、深さ30~60cmを測る。

(出土遺物) ア) 土器 1号住居址の出土土器を第8図に示した。当住居址の土器は、4点の繩維を含む土器片を除き、ほとんどのものが中期初頭に属するものであった(第10図参照)。

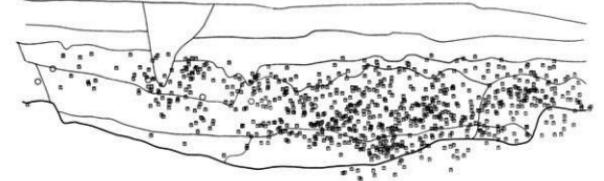
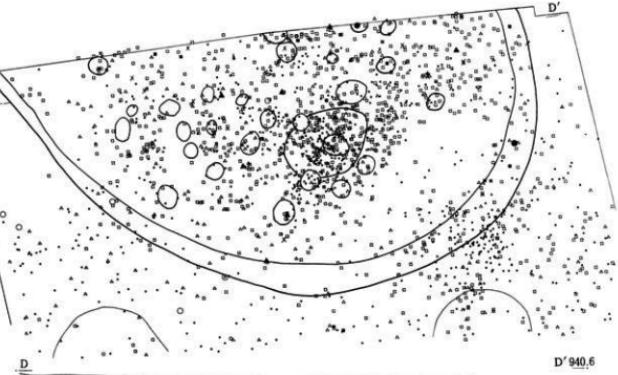
中期初頭の土器はすべてを掲載したわけではないが、2号住居・3号住居のものと比べると所謂集合沈線文系の土器の出土は少ない。主体的に出土しているのは繩文を地文にして、これに半截竹管などで施文したもの(3、14、17、18など)である。1は隆帯を貼りつけこの上にも繩文を施す。口縁部は断面が三角形で裏面にも繩文が施されている。胴部にも繩文が地文として施されている。器形の知れる数少ない土器である。1号住居址出土の他の土器も多くは同様な器形であると思われる。しかし、6のように、集合沈線系の土器に一般的な「く」の字形の口縁形態を呈するものもある。接合関係については、住居内同志、住居直上の包含層との接合のみであった。

イ) 石器 石器は第9図に示した。石鏃6点(4点は欠損品)、石錐3点、ビエス・エスキュー1点、打製石斧6点(3点は欠損品)、磨り石1点、使用痕のある剥片31点、その他加工痕をもつもの12点であった(ただし、1号住居址の包含層出土のものも含む。7号土坑出土のものは除く。第42図参照)。さらに、黒曜石のチップ・フレイクが多数出土している(第10図)。5には小さな抉入が認められる。6・7・10は使用痕のある剥片として扱った。8はスクレイパー様の石器であるが、加工痕を有する剥片に分類した。9はビエス・エスキューであろう。10(チャート)と打製石斧を除いてすべて黒曜石製である。

(出土状態) 遺物の出土状況を第7図に示した。床面のラインより下から出土しているものは、7号土坑のものである。垂直分布図で見ると3-b層からは土器が多く出土し、その下層の3-c層からは黒曜石チップ類が多く出土していることがわかる。遺物廃棄時の時間差であろうか。図示できなかったが、土器の違いによる出土層位差はなかった。

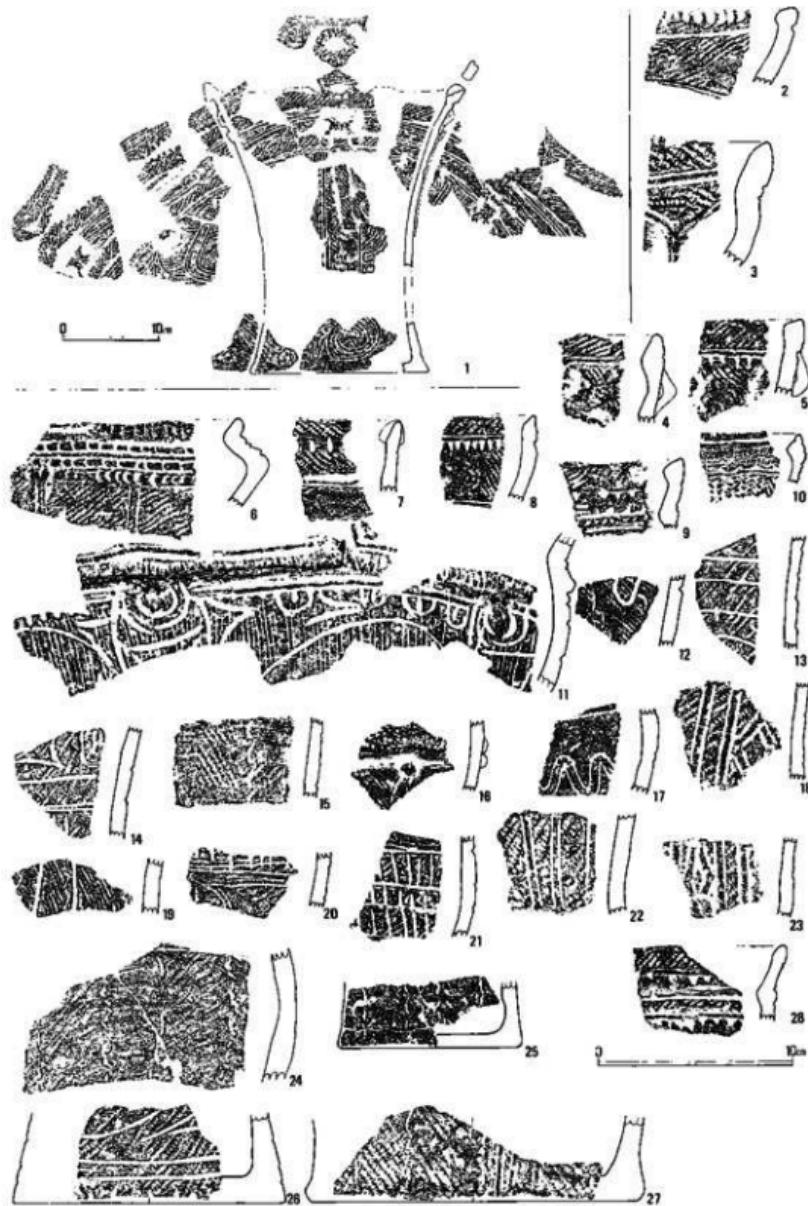


第6図 1号住居址

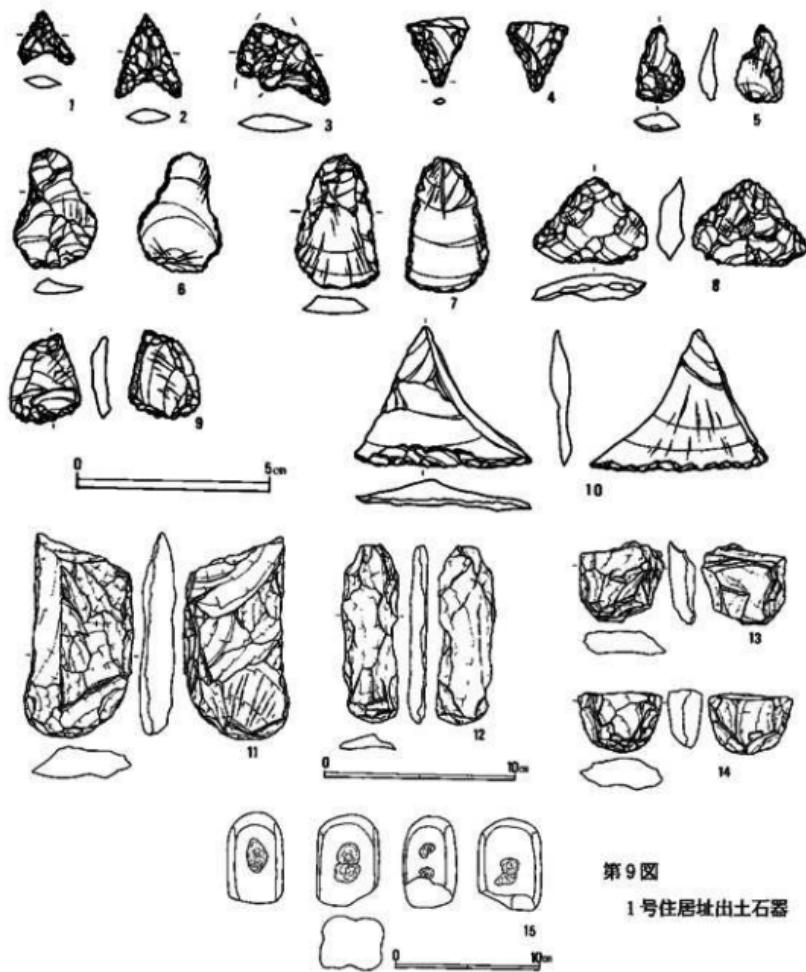


(垂直方向の縮尺は1/30)

第7図 1号住居址 遺物ドット図



第8図 1号住居址出土土器



第9図

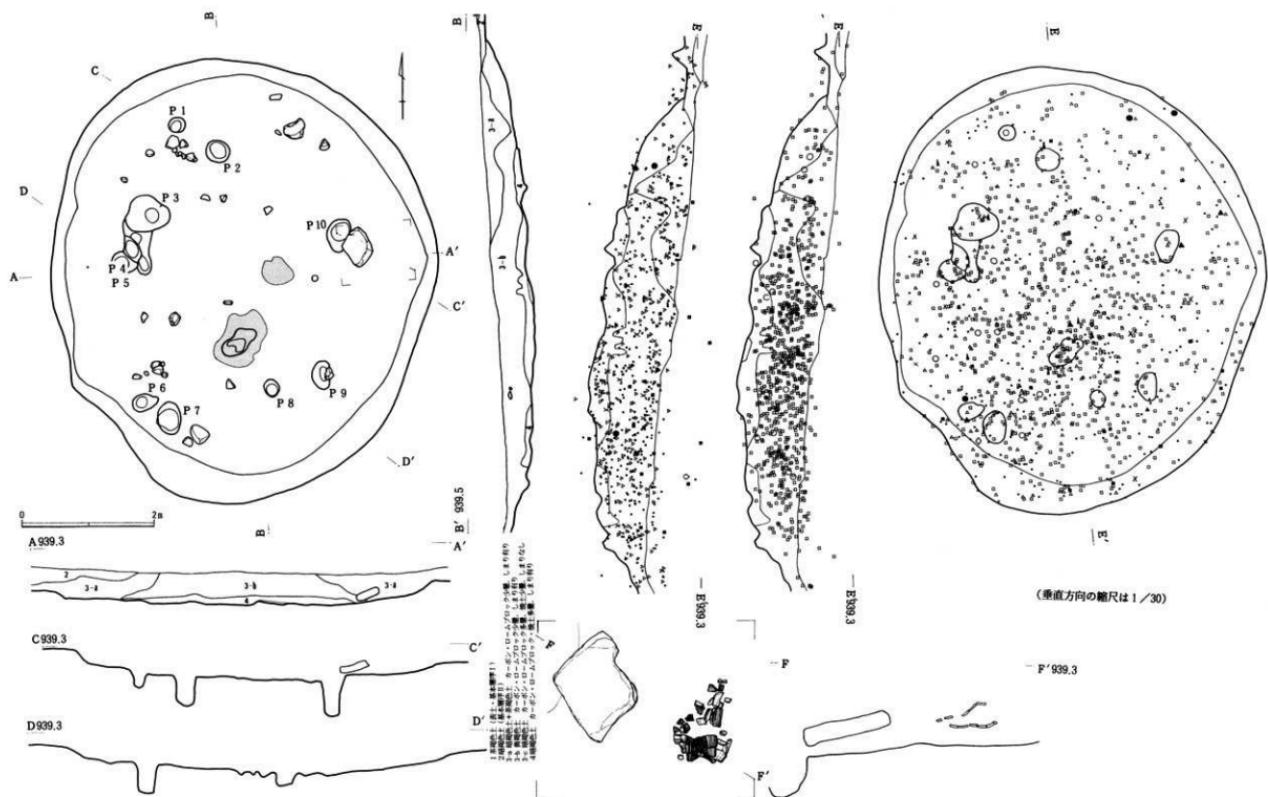
1号住居址出土石器

2号住居址

(位置) B区14・15-G・Fグリッドに位置する。重複造構はなく、本住居址の南東方向に3号住居址が近接している。

(形状・規模) 住居規模は東西6.6m、南北5.8m、である。

(床面・壁) 床面は凹凸が激しく、履土には焼土・炭化物が認められ焼失住居とおもわれる。床面の南側は北側より26cm程低くなっている、南側に傾斜している。壁は東壁、西壁が残存状態が良く、壁高は約20cmを測る。北壁、南壁ははっきりとした立ち上がりがつかめず、外傾し



第10図 2号住居址

第11図 2号住居址遺物ドット図

ている。

(炉) 床面において焼土が確認されているが、はっきりとした炉跡は確認されなかった。

(その他の施設) 本住居址に伴うピットは10個存在するが、柱穴と考えられるものはピット2・3・7・9・10である。ピット1は66cm×56cm×57cm、ピット2は70cm×54cm×35cm、ピット3は50cm×35cm×16cm、ピット4は42cm×25cm×18cm、ピット5は50cm×35cm×53cmである。

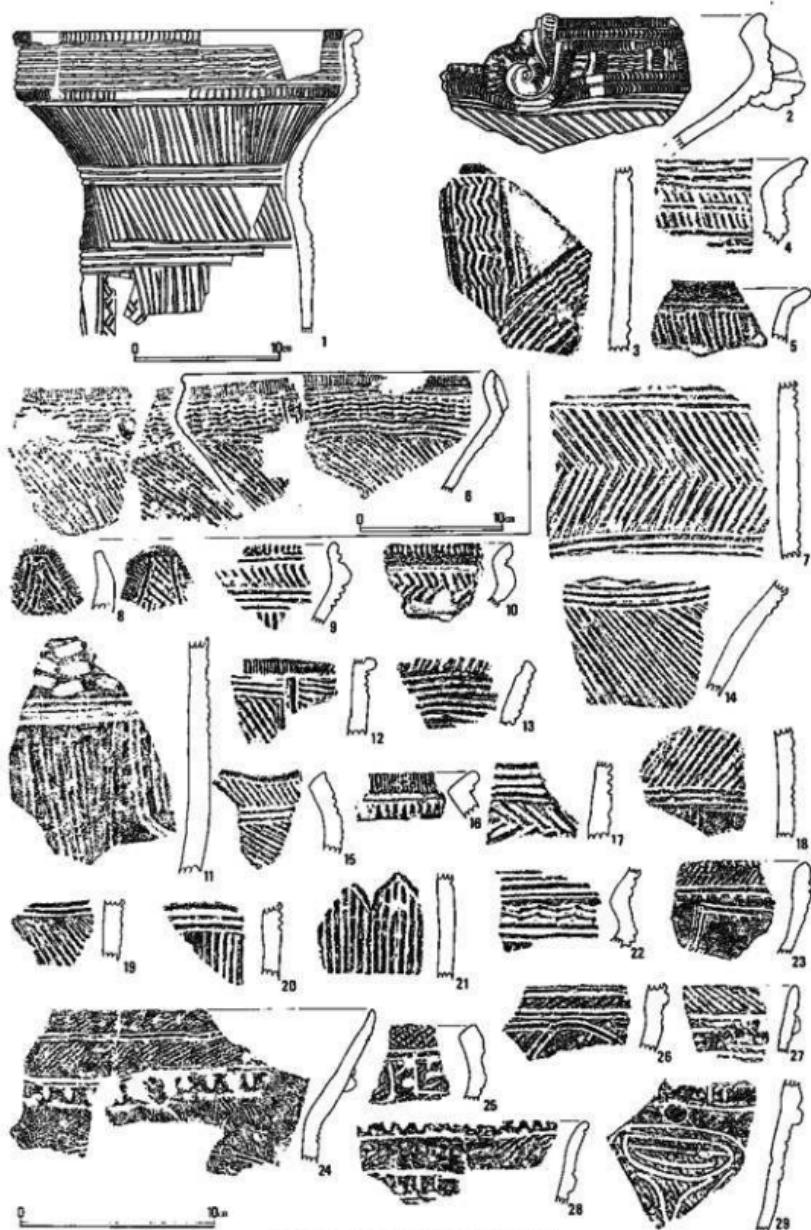
(出土遺物) ア) 土器 出土した土器を第12・13図に示した。図示していないが、織維を含む土器13点が出土している。それ以外はほとんど中期初頭の土器群である(第11図参照)。

33は前期末に位置づけられるものであろう。8の裏面および12にはソーメン状の貼りつけを行な格子目状の文様を作つておき、前期末的な様相を有している。1~22(除く11)は所謂集合沈線形の土器である。1は13図のように床面からやや浮いた位置でつぶれて出土した。2・9・12等と比べると施文の仕方がやや雑である。6はCトレーナおよびC-6グリッド出土の土器と接合した。23から後は縄文・細線文を有する土器群である。半截竹管や棒状工具を用いて施文する。柄状の把手がつく場合が多い。38は剥落しているが、口縁下の沈線にそって隆帯が貼り付けられていたと思われる痕跡がある。43と同一個体であるかもしれない。44は口縁部の一部であるが、内面にハート型をした人面と思われるものが描かれている(表紙原寸図参照)。36・41は隆帶上に半截竹管で押し引き文をつけ、薄手で繊細な感じのする土器である。胎土に多くの雲母と砂粒を含む。6以外は特筆すべき接合はなかった。

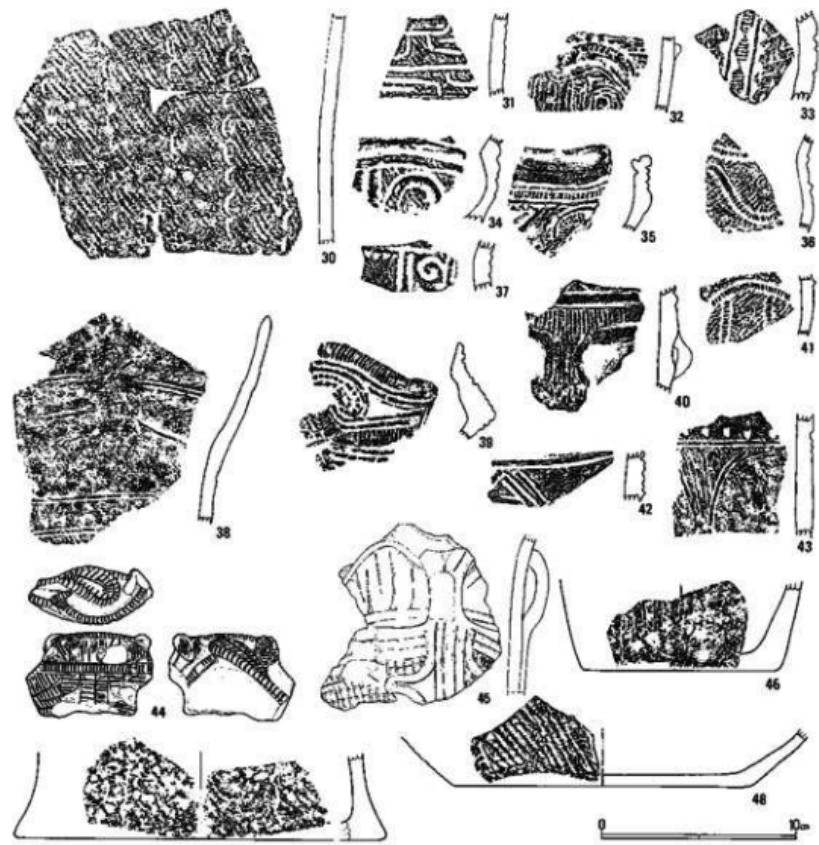
イ) 石器 石器は第14・15図に示した。石鎚7点(2点は欠損品)、石錐3点、打製石斧4点(2点は欠損品)、磨り石1点、黒曜石原石1点、使用痕のある剥片24点、その他加工痕をもつものの14点であった(ただし、2号住居址上の包含層出土のものも含む)。2は石錐として扱ったが石鎚としての属性も有しており、断定は難しいところである。7は残核と思われるものである。処理上は2箇所以上の打点をもつものとしてある。剥離の方向が表面と裏面で90度異なっており、制作工程の一端がうかがい知れる資料である。8~11以外はすべて黒曜石製である。第12図1の土器の横から石皿が出土している。中央がやや窪んでいるが、ほぼ平らで滑らかな面をもっている。

ウ) その他の遺物 キセルの吸い口1点が出土している(第41図5)が、住居址にかかっていた木根の中から出土したもので、2号住居とは無関係である。

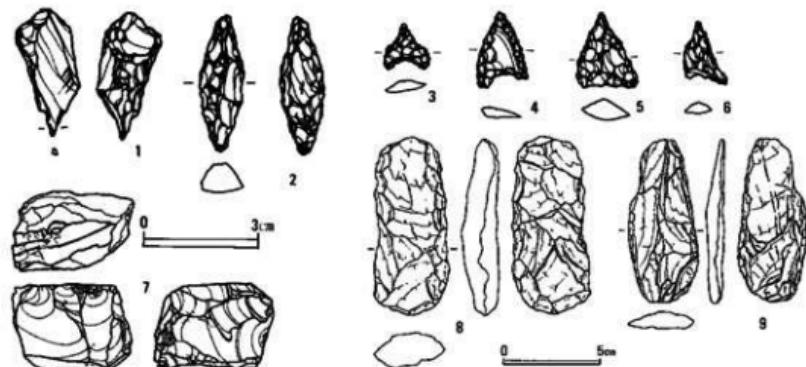
(出土状態) 中央部から多くの遺物が出土している。土器は3-b層から集中的に出土するが、石器類は比較的均等に分布する傾向を示す。石器類のなかでも、チップ・フレイクは均等に分布するが、打製石斧・石鎚などの石器は上層からの出土に偏っている。



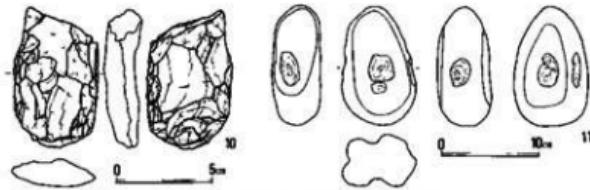
第12图 2号住居址出土土器(1)



第13図 2号住居址出土土器(2)



第14図 2号住居址出土石器(1)



第15図 2号住居址出土石器（2）

3号住居址

（位置）B区12・13・14-Hグリッドに位置する。住居址東壁側は15号土坑と、中央部では16号土坑と重複関係にある。16号土坑は本住居址よりも古いことが確認されたが、15号との新旧関係ははっきりつかむことはできない。

（形状・規模）住居規模は東西7.6m、南北推定3mであるが、南側は発掘区外へ伸びているため正確な規模をつかむことができない。平面形は東西に長い楕円形と推定される。

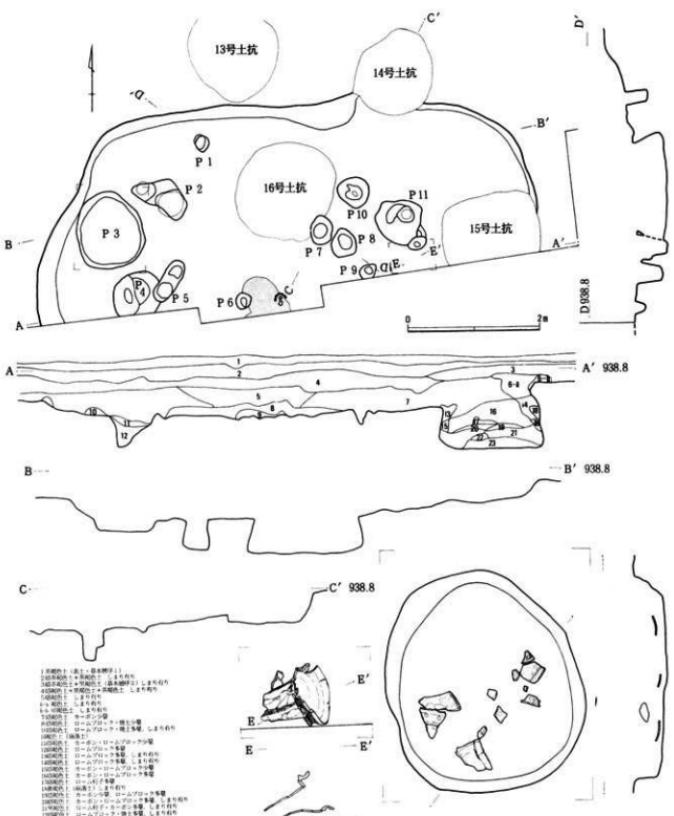
（床面・壁）床面は多少凹凸になっているが、全体的に良くしまっている。壁高は残りがよくほぼ垂直に立ち上がる北壁が約32cmを測り、その他外傾している東壁20cm、西壁14cmである。

（炉）住居址中央部のやや西壁よりに埋立炉があるが、炉跡南側は、発掘区外に伸びているため正確な範囲はつかめない。

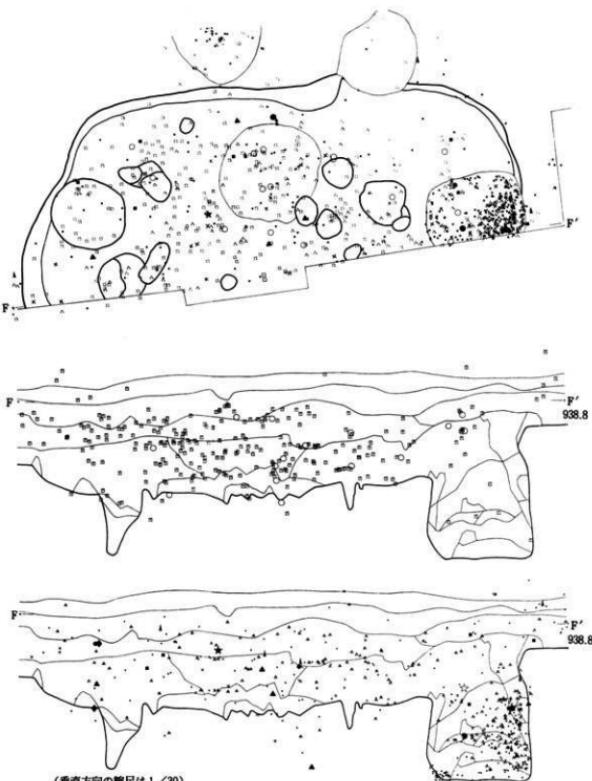
（その他の施設）本住居址に確実に伴うと思われるピットは11個存在するが、南壁よりも2本の存在が想定される。柱穴と考えられるものはピット2・4・11であり、ピット2は42cm×40cm×44cm、ピット4は50cm×50cm×32cm、ピット11は68cm×66cm×57cmである。西壁にあるピット3（1.1m×95cm×16cm）からはまとった遺物が出土している。

（出土遺物）ア）土器 出土した土器を第18・19図に示した。ほとんどのものが中期初頭に属する土器群である。

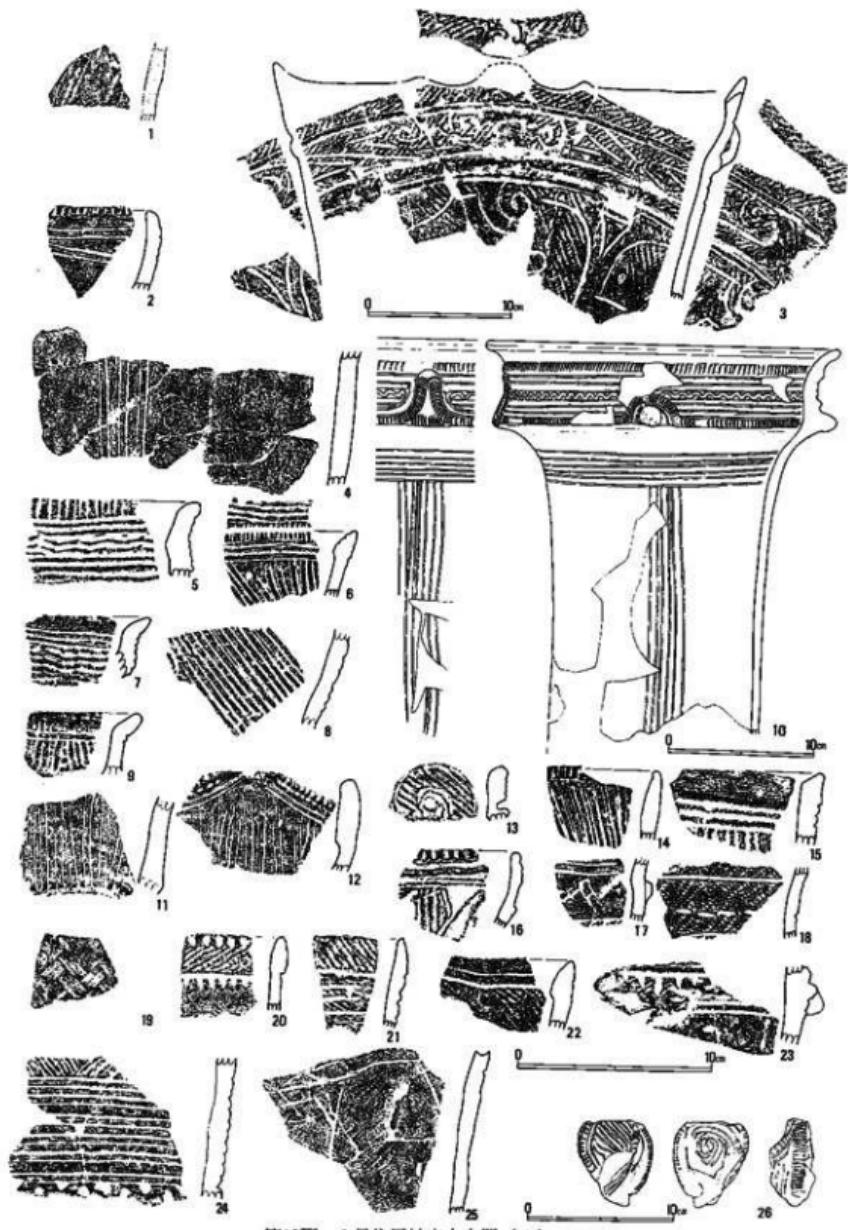
1は表面に条痕を有する繊維土器である。繊維を含む土器は合計15点出土しているが図示できるものはほとんどない。2以降は中期初頭の土器である。全体的にみると、1号住居址と同様に集合沈線系の土器が比較的少ない。5・7・8・13・16・34などが集合沈線系の土器群であろう。いずれも施文がやや雑である。6・9・11・12・14は半截竹管で雑に平行沈線を引く手法をとっており、文様帶が省略されている土器群である。集合沈線系の土器群の変化したものとして考えることができるかもしれない。3は住居西壁よりのピットから出土した土器である（第16図）。繩文を地文とし棒状工具で施文している。口縁部は断面三角形で表裏に繩文を施し、4単位の波状を呈する。橋状の把手も4つ付くようである。10は炉址の東部分からほぼ床面に接するように出土した（第16図）。文様は屈曲部から口縁にかけての部分に集約され、半截竹管文や交互刺突文等で充填されている。胴部の平行沈線は半截竹管により浅く付けられている。4単位に区画されているものの、その間隔には広狭がある。底部は広がる形の当期に特徴的なものであろう。4も10と同様な土器であろう。炉の一部に埋められていたものである



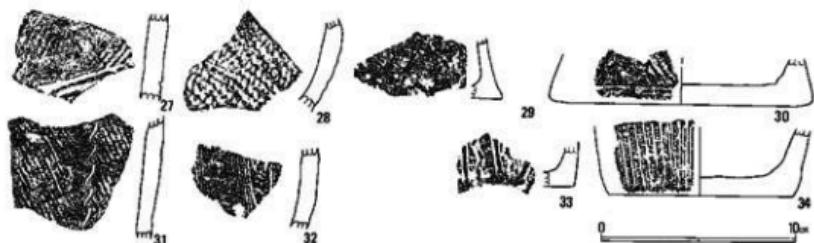
第16図 3号住居址



第17図 3号住居址遺物ドット図



第18図 3号住居址出土土器(1)



第19図 3号住居址出土土器(2)



第20図 3号住居址出土石器

(第15図)。2は10の中から出土した。26は把手である。19は底部の網代痕である。

イ) 石器 石器は第20図に示した。石礫3点(1点は欠損品)石錐1点、打製石斧5点(1点は欠損品、1点は出土地点不詳)、ピエス・エスキュー1点、黒曜石原石1点、使用痕のある剥片11点、その他加工痕をもつもの4点であった(ただし、3号住居址上の包含層出土のものも含む)。4はピエス・エスキューである。3号住居址は比較的石器・剥片の数量が少ない。しかし、第17図でわかるように重なる15号土坑からは集中的に石器・剥片類が出土している。

ウ) その他の遺物 土製の玦状耳飾が1点出土している(第40図3)。胎土中に多くの雲母を含んでいる。

(出土状況) 土器と石器類の分布はほぼ重なっている。土器の違いによる出土層位の違いはなかった。石器類の集中する15号土坑との関わりが注目されるところであるが、出土状態からは15号土坑の方が古いように見える。

(2) 土坑

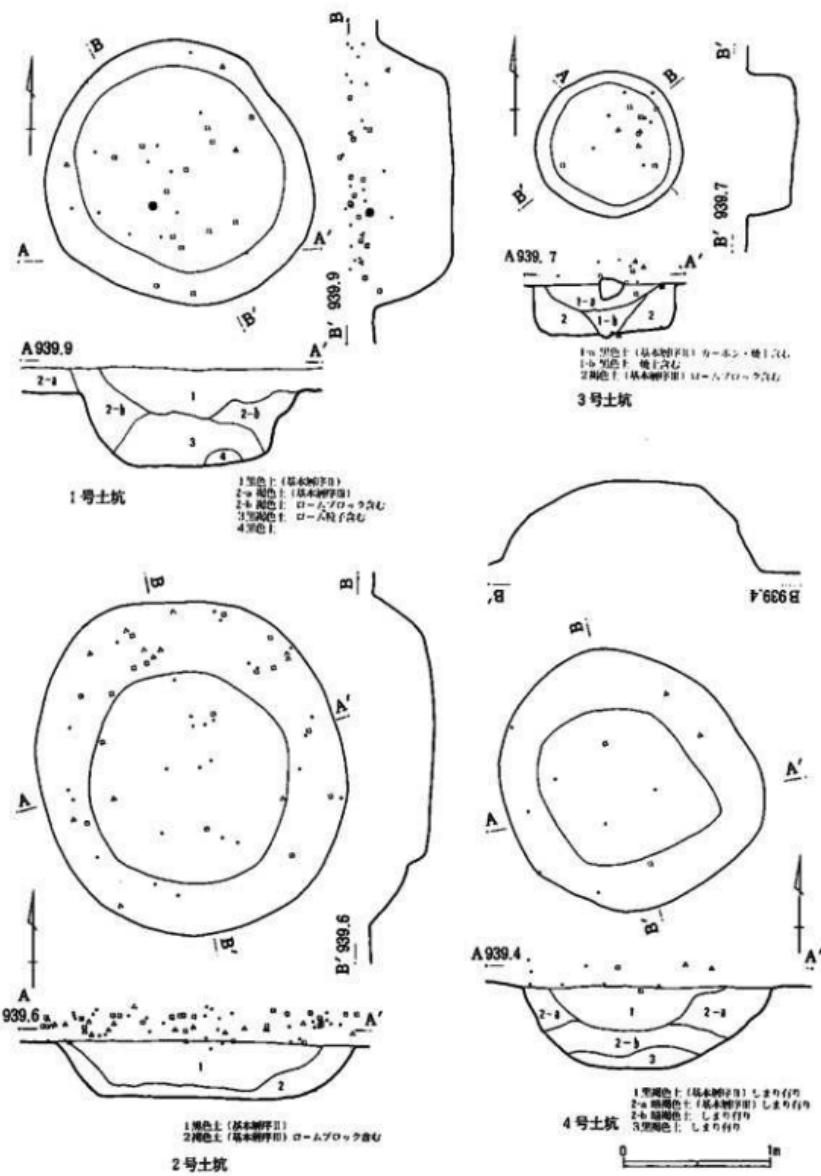
確認された土坑は合計23基であった。位置・形状等については、まとめて第1表に示し、それぞれの図面を第21～26図に示した。7号土坑は1号住居址に切られ、16号土坑は3号住居址に切られ、14・15号土坑は3号住居址と重なっている（切り合い関係は不明）。他はすべて単独で存在した。この中で特に遺物の集中していたのが、7・8・15号土坑であった。遺構の確認面より下で出土した土器がまったくなかった土坑は6・17・18号土坑、図示するのが困難な小破片のみを出土したのが2・4・5・6・14・16・17・18号土坑であった。したがって、土坑の時期決定は不可能なものや確定性の低いものが多い。

(出土遺物)

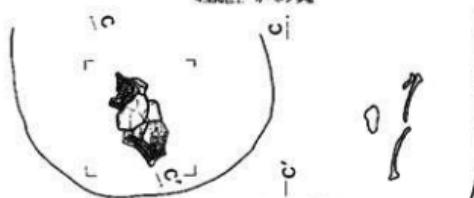
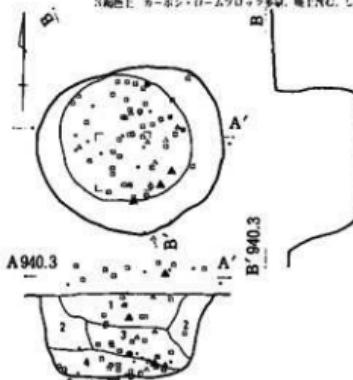
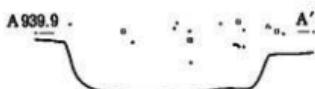
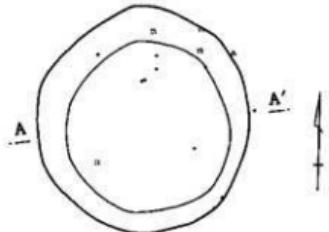
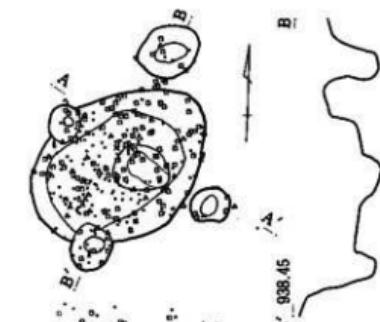
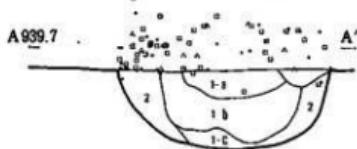
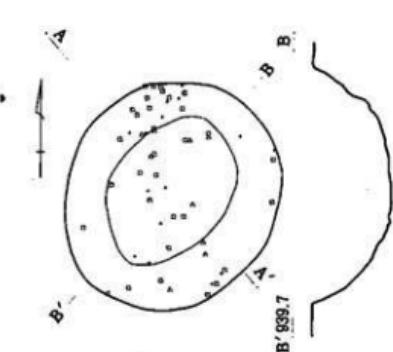
ア) 土器　出土した土器を第27・28図にできるだけ図示した。1は多量の繊維を含む脆弱な土器である。9は竹管を押し引きすることによる瓦状の文様である。6～10は7号土坑出土であるが1号住居址との分別がはっきりできなかったものも含まれている。17は図22に示した

土坑No	図No	形 状	長軸×短軸×深さ			坑 底	位置(グリット)	備 考
1号	21	円 形	184	174	68	平 坑	A-13-C	時期不明
2号	"	円 形	240	220	40	平 坑	A-14-B	時期不明
3号	"	円 形	102	96	36	平 坑	A-13-B	中期初頭？
4号	"	不製円形	184	166	56	平 坑	A-15-A	時期不明
5号	22	円 形	162	146	54	ほぼ平 坑	A-15-C	中期初頭？
6号	"	円 形	156	146	32	平 坑	A-12-C	時期不明
7号	"	楕円形	134	94	52	平 坑	A-14-C・D	中期初頭 (1号住より古い)
8号	"	不製円形	128	112	58	平 坑	A-9-C	中期初頭
9号	23	楕円形	142	(128)	42	平 坑	A-12-D	中期初頭
10号	"	円 形	170	158	40	平 坑	A-10-B	中期初頭
11号	"	円 形	158	154	36	やや凹凸有り	A-4-B	中期初頭
12号	"	隅丸方形	138	120	50	ほぼ平 坑	A-15-C・D	時期不明 (南側は木の根より推乱)
13号	24	不製円形	160	148	76	平 坑	B-13-G・H	中期初頭 (断面フラスコ状)
14号	"	不製円形	188	108	40	平 坑	B-13-H	時期不明
15号	"	隅丸方形	138	126	100	平 坑	B-14-H	中期初頭？ (断面フラスコ状)
16号	"	隅丸方形	144	144	50	ほぼ平 坑	B-13-H	中期初頭？ (断面フラスコ状)
17号	25	不製円形	128	128	26	ほぼ平 坑	B-8-9-G	時期不明
18号	"	楕円形	144	116	26	やや凹凸有り	B-5-6-E	時期不明
19号	"	不製円形	114	110	36	やや凹凸有り	B-3-4-F	中期初頭
20号	"	不製円形	136	130	30	やや凹凸有り	B-4-F	中期初頭
21号	"	不製楕円形	112	88	22	テラス有り	B-2-G	中期初頭
22号	26	不製楕円形	126	100	20	やや凹凸有り	B-10-H	中期初頭
23号	"	円 形	70	66	28	ほぼ平 坑	A-12-B	中期初頭

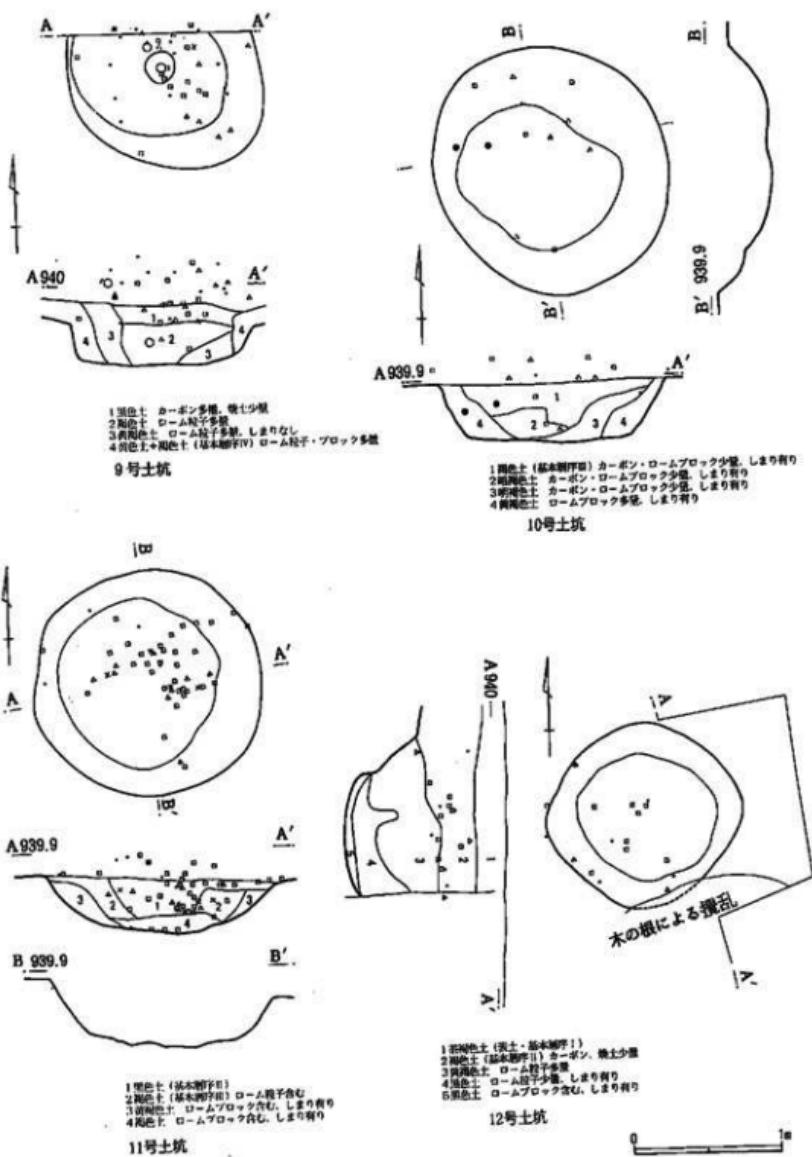
第1表 土坑一覧表



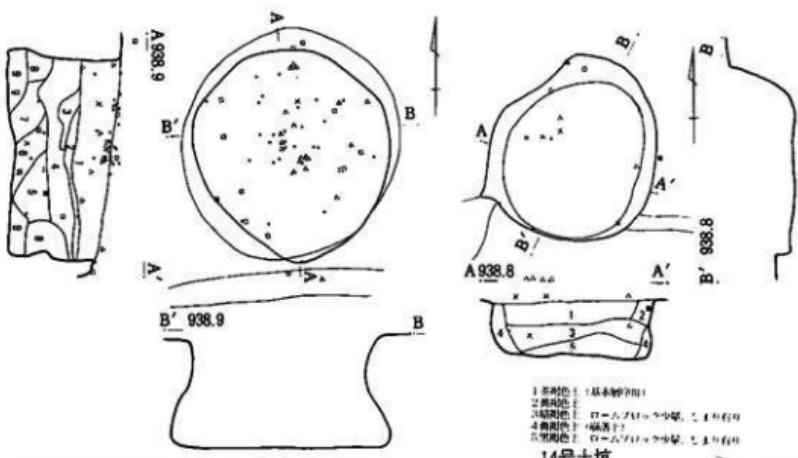
第21図 土坑（1）



第22図 土坑（2）



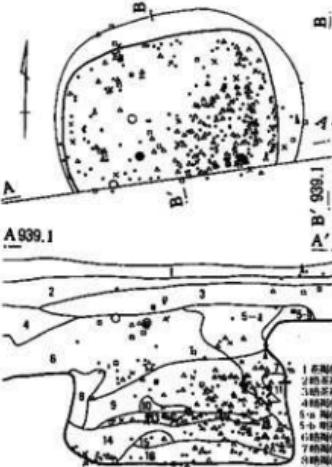
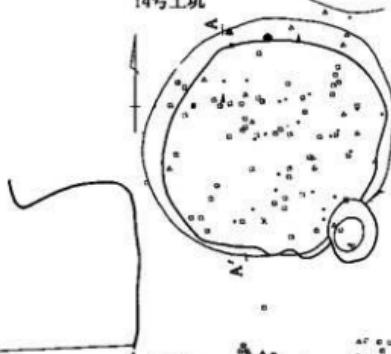
第23図 土坑 (3)



1 基本層土（基土・標準土） カーボン・ロームブロック少量
2 黄褐色土 カーボン・ロームブロック多量、しまり有り
3 黄褐色土 カーボン・ロームブロック少量、しまり有り
4 黄褐色土 カーボン少量、ロームブロック多量、しまり有り
5 黄褐色土 カーボン少量、ロームブロック多量、しまり有り
6 黄褐色土 ロームブロック多量、しまり有り
7 黄褐色土 ロームブロック多量、しまり有り
8 黄褐色土 ロームブロック多量、しまり有り
9 黄褐色土（標準土）
10 黄褐色土 カーボン少量、ロームブロック多量、しまり有り

1 黄褐色土（基本層土）
2 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り
3 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り
4 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り
5 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り

14号土坑



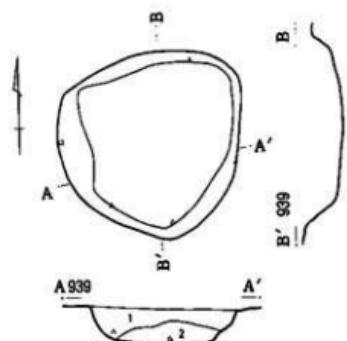
13号土坑



1 黄褐色土（基土・標準土） ロームブロック少量、しまり有り
2 黄褐色土 ロームブロック多量、しまり有り
3 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り
4 黄褐色土 ロームブロック少量、しまり有り
5 黄褐色土（標準土） ロームブロック多量、しまり有り
6 黄褐色土 ロームブロック多量、しまり有り

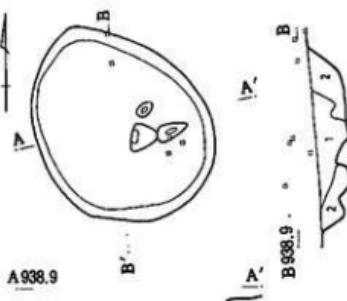
16号土坑

第24図 土坑 (4)



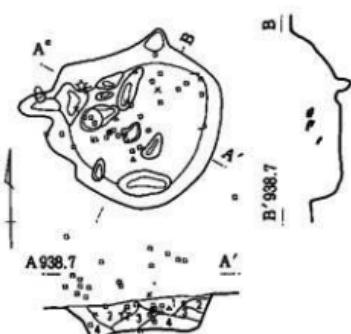
1 黄褐色土 (基本剖面) ローム層少々含む。しまり有り
2 黑褐色土 カーボン ローム ブリッカ付。しまり有り

17号土坑



1 黄褐色土 (基本剖面) カーボン ローム ブリッカ付。しまり有り
2 黑褐色土 カーボン ローム ブリッカ付。しまり有り

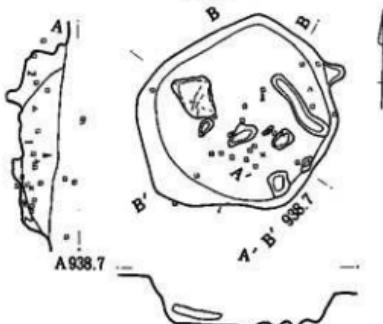
18号土坑



1 黄褐色土 (基本剖面) ローム層少々含む
2 黑褐色土 (基本剖面) ローム層多量。しまりなし
3 黑褐色土 しまり有り
4 黄褐色土 ローム層多量

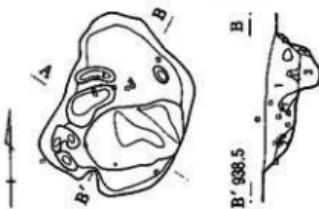


19号土坑平面・微細



1 黄褐色土 (基本剖面) ローム層少々含む
2 黑褐色土 (高深) カーボン少量

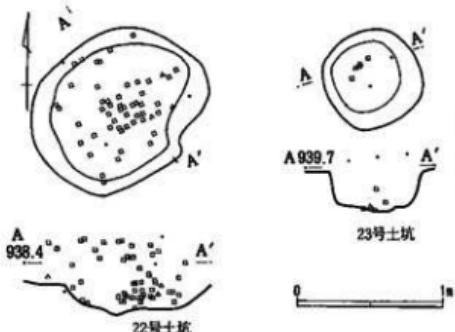
20号土坑



1 黄褐色土 (基本剖面)
1.1 黑褐色土 + + + +
2 黑褐色土 しまり有り
3 黄褐色土 のれん多量

21号土坑

第25図 土坑 (5)

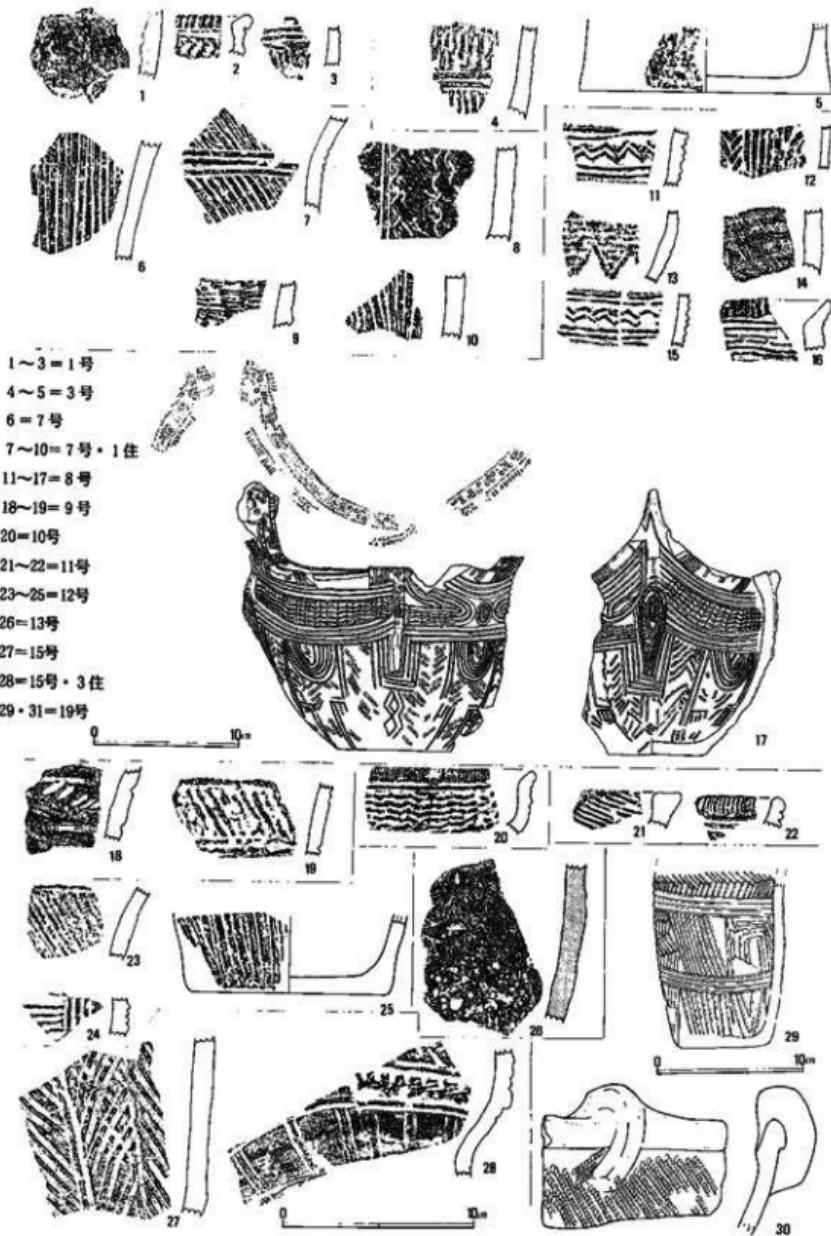


第26図 土坑(6)

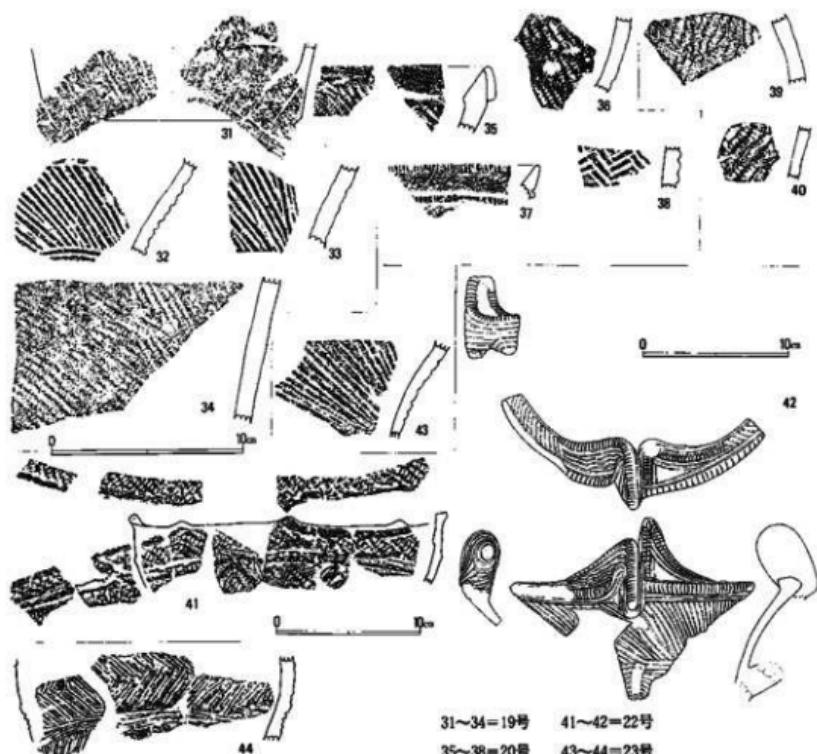
ように、8号土坑の中央から浮いた状態で、2個の石とともに、何かに被せるような状態で出土した。約半分しか残っていないが、つくりは非常に丁寧で手がこんでいる。横断面は正円ではなく舟形である。口唇部を広くとり、ここに直径3mm程の粘土の輪を並べて貼りつけている。その外側には細い粘土縁を並べて貼りつけている。胸部は縄文・結節縄文を施文したのち、半截竹管により平行沈線を描いている。前

期末的な様相を強く有する土器である。26は纖維を含む土器である。27は15号土坑出土である。厚手で微量の纖維と多くの白色鉱物を含む。沈線の断面は浅く広く角張っており、貝殻によるものとも類似する。時期決定は難しいが早期に属するものであろうか。28は15号土坑の所属としたが3号住居址所属の可能性も高い。29は19号土坑のほぼ中央から出土したものである。底からは20cmほど浮いていた(第25図)。口縁部は欠損しやや歪んでいる。34は全面縄文で施文されており、第34図92と同一個体となる可能性もある。35は内面にも縄文が施されている。37は2号住居址出土の36・37と同様の土器である。41と42は22号土坑の出土である。41は胎土に粒の大きめの砂を多く含んでおり、黄褐色の色調、薄手の器壁などから他の中期初頭の土器群から駿別できる土器である。8つの小さな突起を口縁にもち、口唇部には内外にしっかり角を作っている。内面は丁寧になでてある。隆帶は断面三角形の低いものである。縄文は口縁内面にも施される。縄文原体はR L(多条か?)である。当期の西日本の土器と思われる。42は丁寧に施された集合沈線系の土器である。44は表面が黄灰色で、肌理の細かい胎土を使用している。施文は半截竹管と思われる工具でやや難に行われている。第32図40の土器と非常によく似ている。

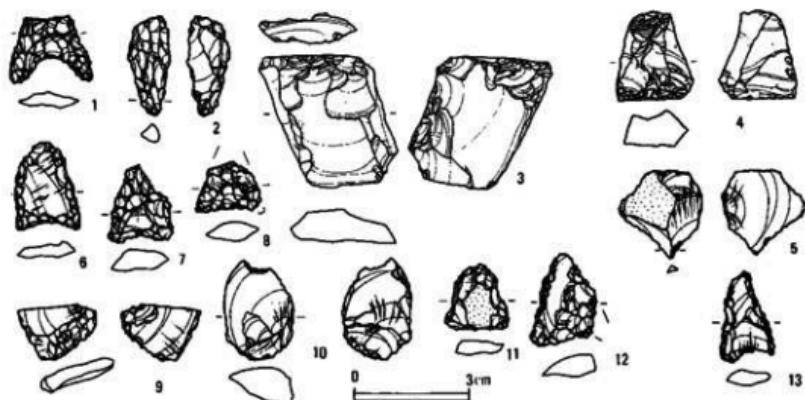
イ) 石器 出土した石製品のうち石器・加工痕のある主なものを第29・30図に示した。それぞれの土坑で何が出てるかについては、第21~26図のドット図で示した。数量的には少ない。3は核と思われる。4・9・10は加工痕のある剥片として扱った。11は加工途中の石鎌であろうか。16は磨製石斧である。綠岩製で、一度折れたのち、もう一度刃部を付け直している(図中記号☆)。チップ・フレイクについては、7号土坑・15号土坑から集中的に出土している。いずれも住居址と切り合い関係にあり、土器の出土がほとんどなく所属時期が問題になるところである。7号土坑からは、都合上図示できなかったが、ドット図で示したものよりも下の部分からもチップが多く(765点・65g)出土している。これらは、ブロック状に出土する状態から考えると、何處かにわたりまとめて廃棄されたものである可能性が高い。



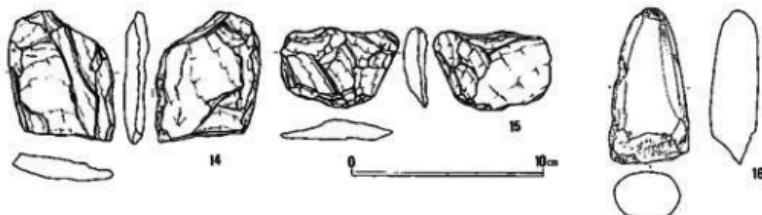
第27図 土坑出土土器（1）



第28図 土坑出土土器（2）



第29図 土坑出土石器（1）



第30図 土坑出土石器（2）

（3） 遺構外出土の遺物

土器

出土した土器片は合計5000点余りであり、この内97%の4900点が縄文時代中期初頭に属するもので、早期末から前期初等と思われる繊維を含む土器が2.6%の130点であった。残りの0.4%ほどは中世以降の土器・陶磁器類であった。以下これらの土器を分類し、当遺跡内でのり方を簡単に述べることとする。

● 第1群土器（第31図1～12）

胎土に繊維を含むものを一括し、第1群とした。

ほとんどのものが、表裏に条痕を有する。しかし、施文具には何種類かあるようで、3のように貝殻を用いていると思われるものや、4のように細かい刷毛目のようなものを用いたものもある。10・11は裏面に格子状圧痕文が認められる。8には棒状の工具による連続的な刺突が入っている。9は乳頭状の尖底である。いずれの土器も繊維が多く含まれており、脆弱な感じを受ける。編年的には縄文時代早期後半から前期前半に位置付けられるものであろう。

● 第2群土器

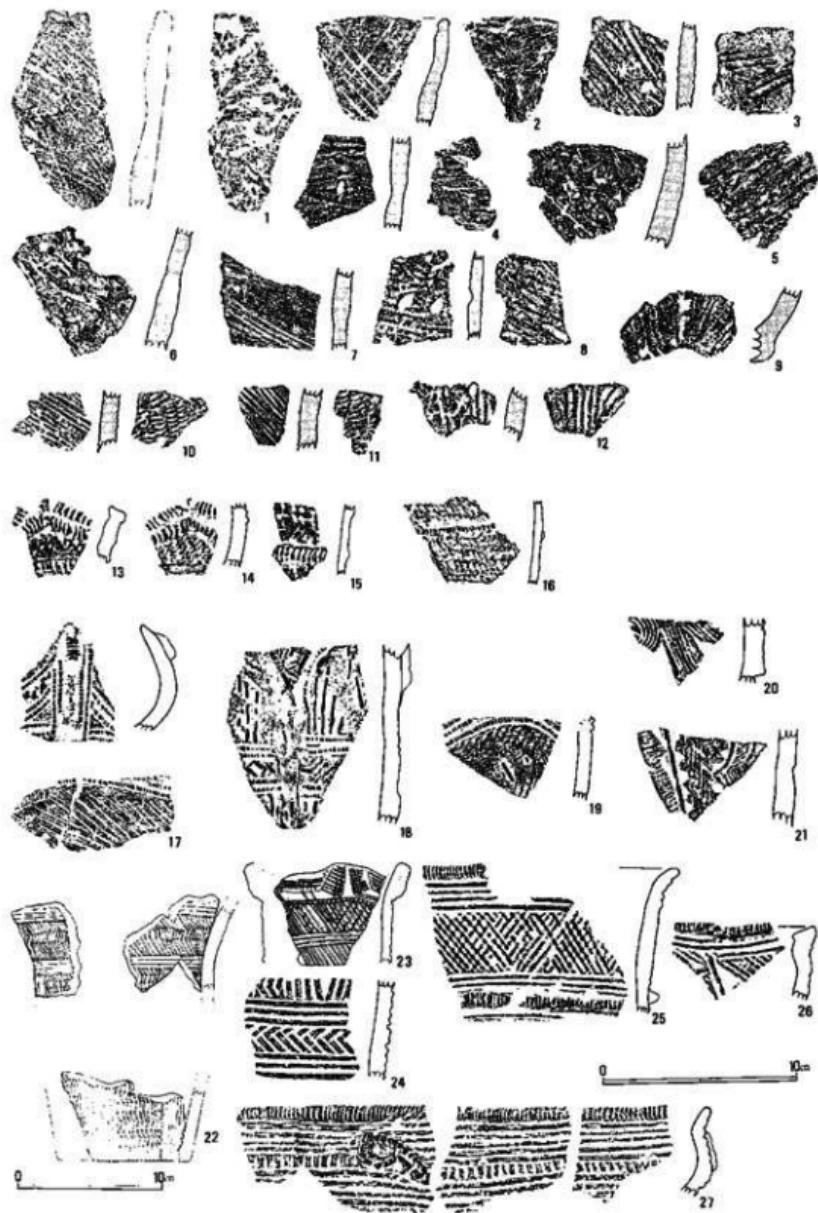
縄文時代前期末から中期初頭に属するものを一括して第2群とした。本遺跡の主体をなす群である。さらに6類に分類した。

a類（第31図13～16）

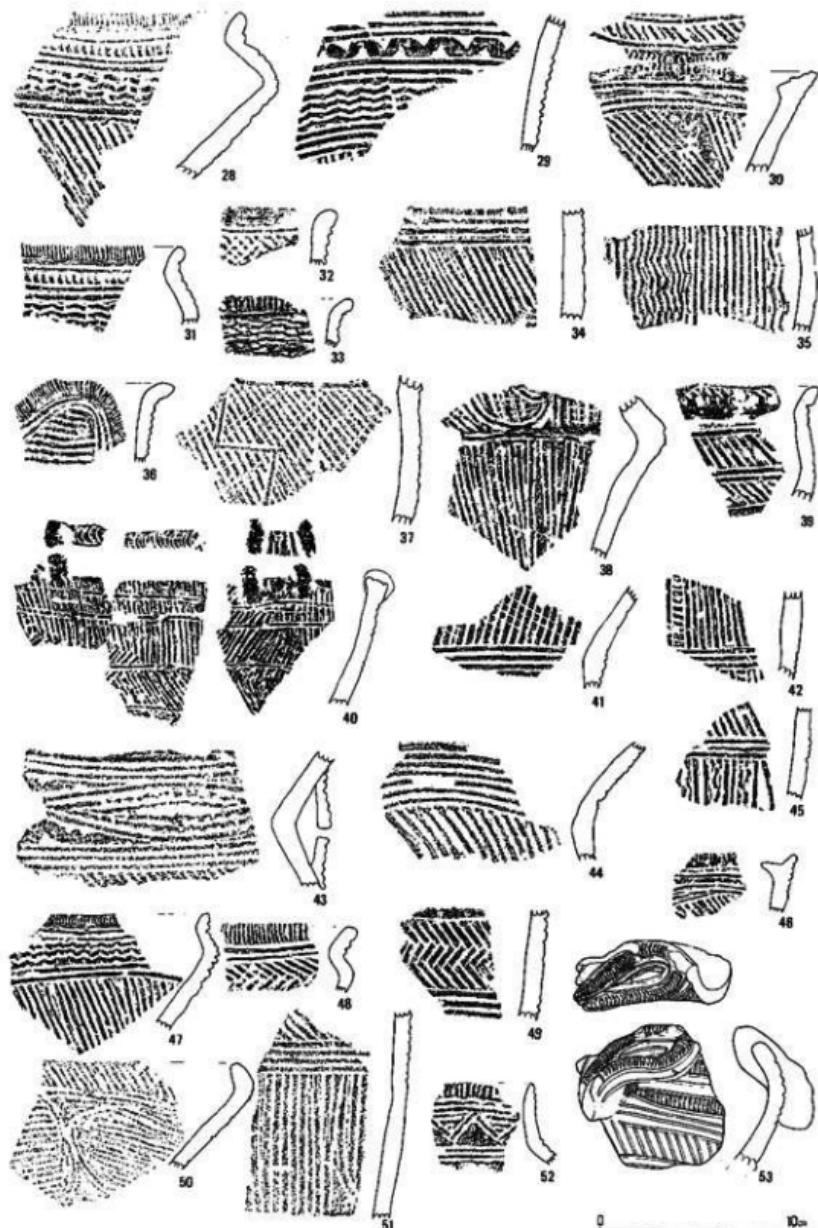
他地域の土器と思われるものを一括した。13は波状口縁の波頂の部分で、表裏ともに肥厚させてその上に縄文をつけ、窓状の工具で口唇部に刻みを入れている。口唇部は非常にエッジが鋭い。14も同一個体と思われる。器壁は胴部で5mmほどと薄手で、内面はよく研かれている。胎土には細かい砂粒を多く含む。22号土坑出土の土器（第28図41）と同様のものであろう。西日本からの搬入品と思われる。

b類（第31図17～21）

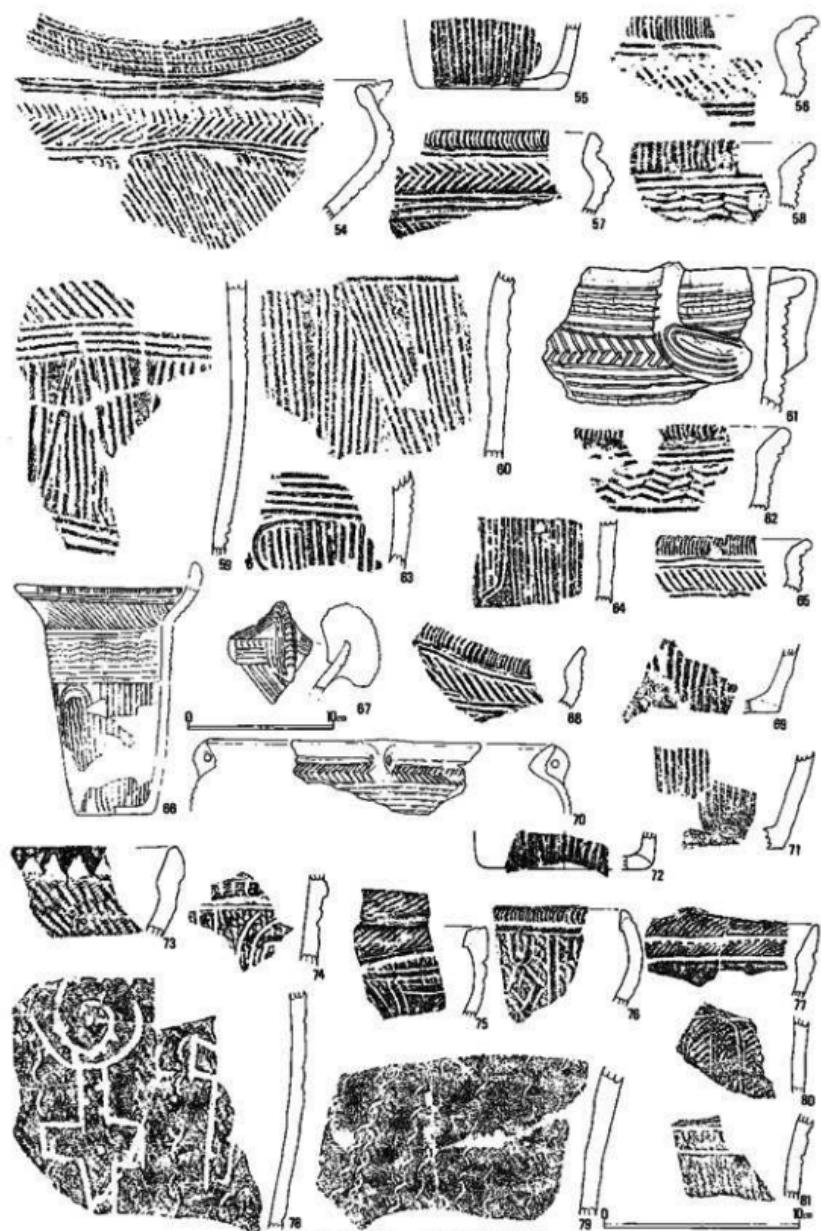
所謂、ソーメン状の貼りつけや結節浮線文・三角刻印文・半隆起上の集合平行沈線等の文様要素をもつ、従来前期末に位置付けられている土器群をb類とした。数量的には少ない。



第31図 グリッド出土土器（1）



第32図 グリッド出土土器 (2)



第33図 グリッド出土土器 (3)

c類（第31図22～27、第32図、第33図1～72）

集合沈線（半截竹管による平行集合沈線）を施している土器をc類とした。d類とした土器群とともに、本遺跡に主体的に存在する土器群である。器形は28のように、口縁部下で「く」の字形に屈曲するのが特徴的で、そこからさらに外反する口縁も多い。胴部はストレートにのびるものが多いようである。この他、やや外反しながら立つ口縁（25）や、口唇部を広く面どりしてそこに沈線を施すもの（54）などもみられる。平口縁となるものと、1つ～4つの耳様の突起（66・67等）がつくものとがある。文様要素としては縦・横・斜めの単純な平行沈線の他に、横位や縦位のジグザグ文（22等）や、半截竹管を押し引きすることによってつけた瓦状の文様もみられる。これらは詳細にみると、隣の沈線ときれいに重なるように丁寧に描いているもの（28等）と、やや難に描いて沈線どうしが切りあっているもの（34等）とがあり、時期差として捉えることも可能かもしれない。胎土には大きく分けて2種類ある。ひとつは黄褐色～赤褐色のきめの細かいもので、もうひとつは黄褐色～黒褐色で白色粒子や雲母を多く含むものである。後者は本類の4割程度を占める。

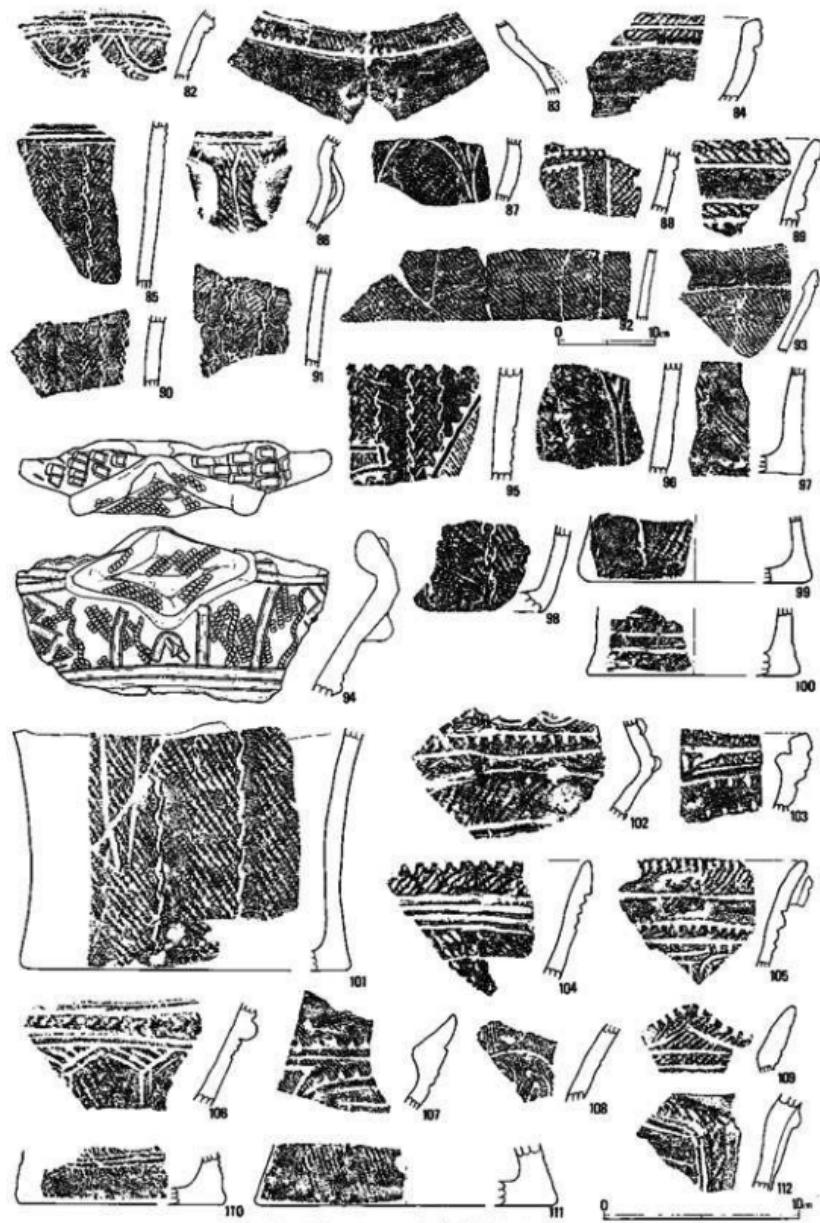
d類（第33図73～80、第34図、第35図113～117）

縄文・撚糸文をもつものを一括して本類とした。縄文のみに注目して抽出した本土器類にはさまざまな内容が入っている。おそらく、時間差も内包していると考えられる。また、第35図113のように胴部には撚糸部を持ちながら、その上半には集合沈線を施すものもあり、さらに分類を進める必要があるかもしれない。数量的にはc類について多いが、c類よりも少ないようである。

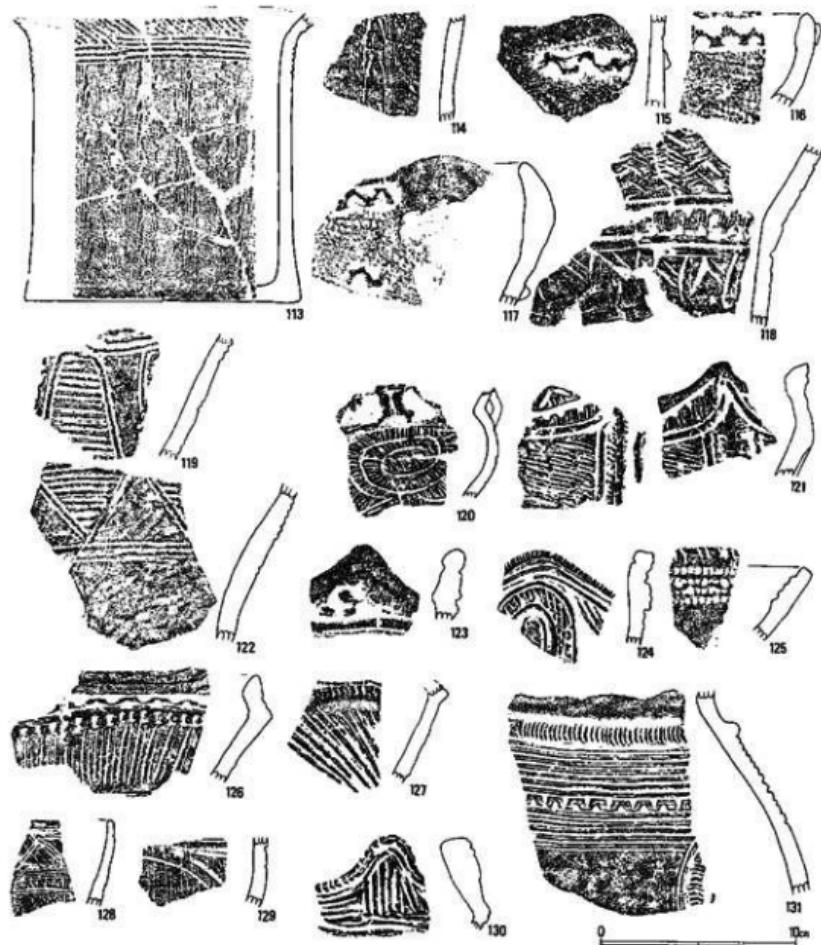
器形をうかがい知れるものは数少ないが、c類のような口縁部形態をもつものは見当らず、緩やかに開くものと、やや内湾するものとがある。底部は据が開く特徴的な形態のものが多い（111・113等）。横状の把手が付くものもみられる。（86・105等）。文様では、胴部に縦に結束縄文を施文するものが多く見受けられる（79・85等）。これらの結束縄文にはいくつかの種類があるようである。縄文を地文とするものには、その上に半截竹管や棒状工具によって施文をしているものが多い。ペン先状工具による刺突（75）や刻み、棒状工具による刺突もある（88等）。103・106等は隆帯を貼りつけ、その上に縄文を施している。115・117は縄文を地文としながらこの上に粘土紐を貼りつけ、上下から交互に指押さえすることで蛇行する隆帯を作っている。数的には少ないが、撚糸文が施された土器もある。113は、非常に繊細な木目状撚糸文である。

e類（第35図118～131）

a類からd類に含まれない土器を一括した。118・120・121は所謂細線文系土器である。この種の土器は関東地方では主体的に存在するが、本遺跡では客体的な存在である。126・127はc類に典型的な器形と共通しており、文様も半截竹管を用いた沈線が使用されており、c類の系統の土器かと思われる。125は浅鉢の口縁部である。



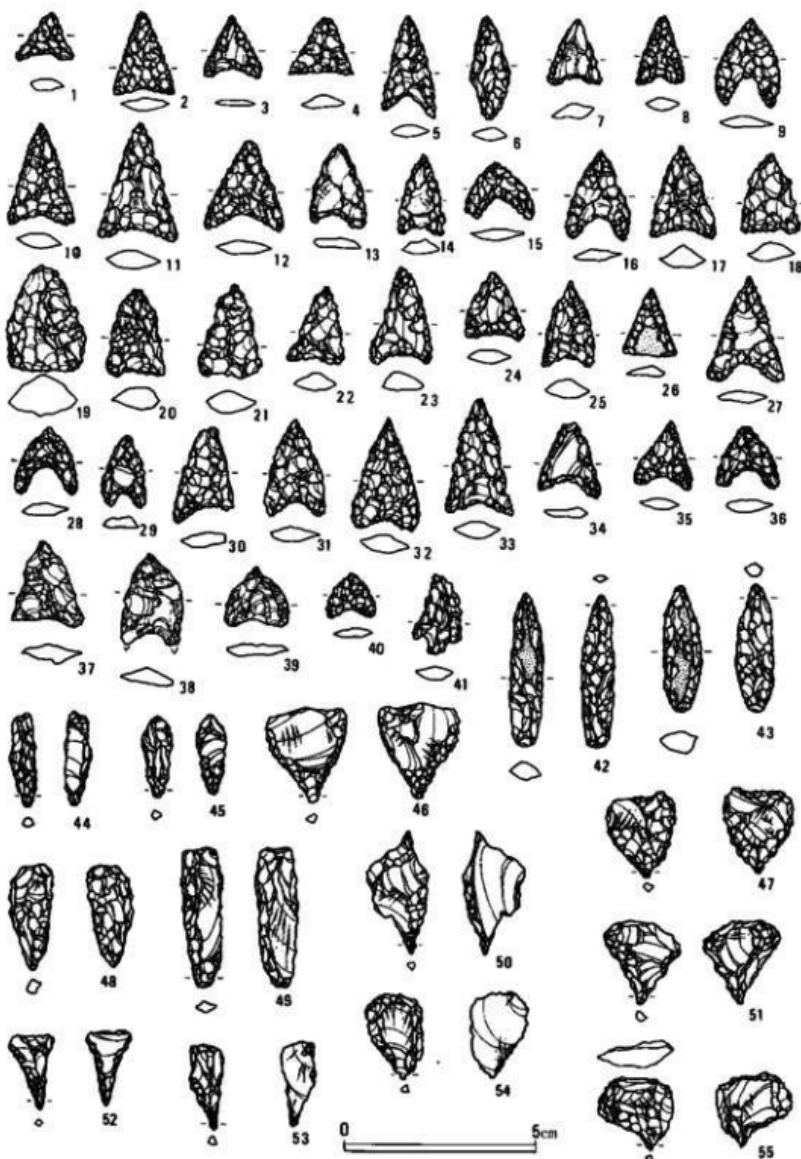
第34図 グリッド出土土器 (4)



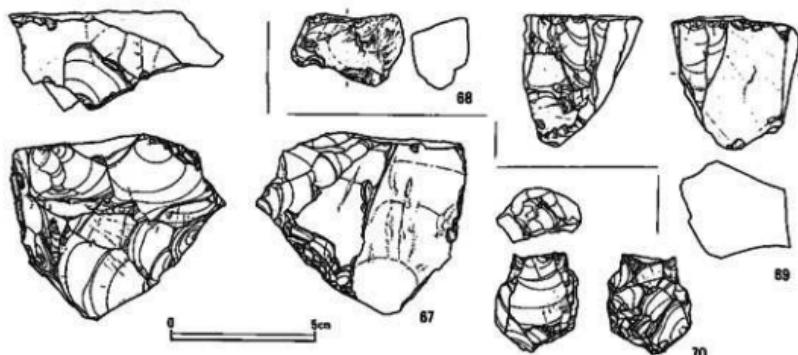
第35図 グリッド出土土器（5）

石 器

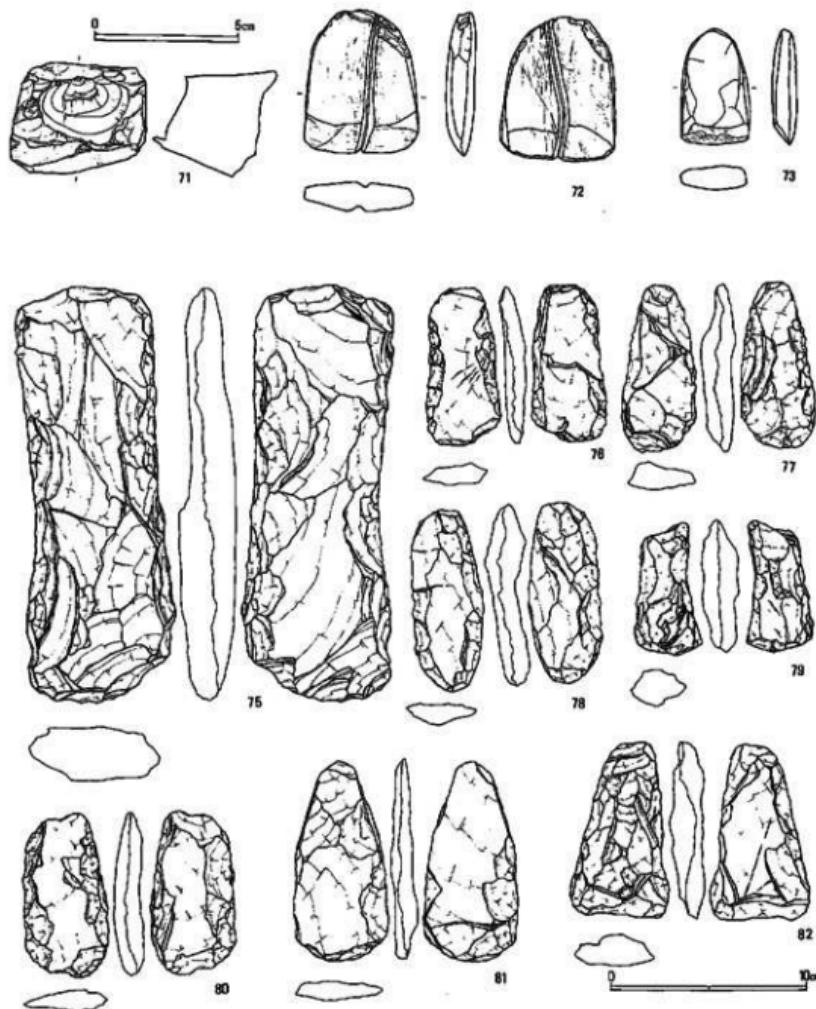
造構外出土の石器を第36～39図に、その出土位置を第42図に示した。1～43は石鎌、44～55は石錐、56～61は石匙、62～64はピエス・エスキュー、65・66は加工痕のある剥片、67～71は原石・2箇所以上の打点をもつもの（核）、72～73は磨製石斧、75～86は打製石斧、87は加工痕のある剥片、88以降は磨り石・凹み石と分類した。チップ・フレイクについては、極度に集中して出土した地点が2箇所認められた（第42図A・B）。特にBは土ごと採集してきたが、手に持つのが危険なほど多くの黒曜石片が含まれていた（第4章参照）。



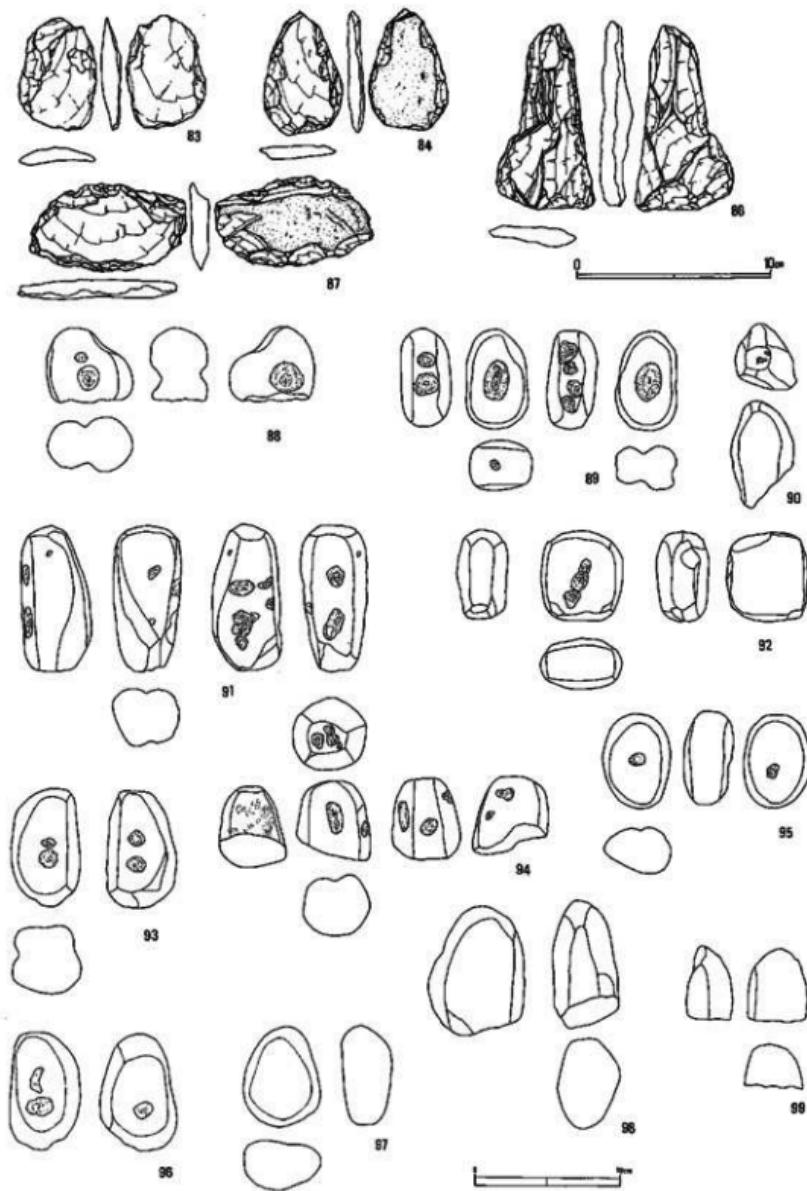
第36図 グリッド出土石器（1）



第37図 グリッド出土石器（2）



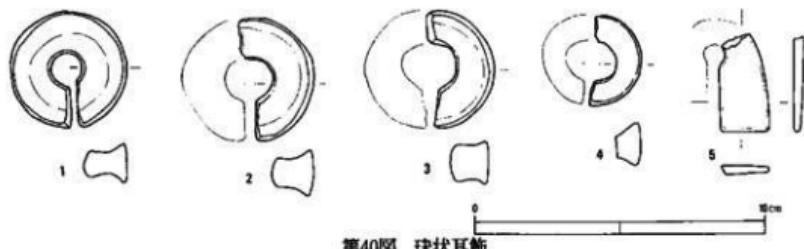
第38図 グリッド出土石器（3）



第39図 グリッド出土石器（4）

その他の遺物

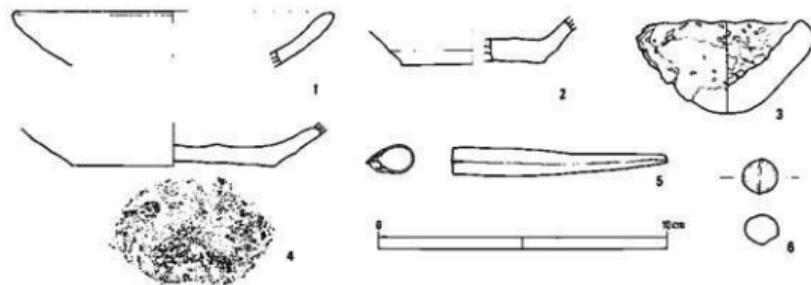
土製块状耳飾りが6点、石製块状耳飾りが1点出土した（下図。出土位置は第42図）。3（3号住居址出土）を除いて遺構外の出土である。特に3-Gのグリッドからは4片がローム面から10cmほど浮いて出土し、2点に接合した（1・2）。2には塗朱が認められる。5は1-Gグリッドから出土した。それぞれの法量は、直径・幅・厚さの順に、1が $40 \times 15.1 \times 13.4$ 、2が $42.3 \times 15.4 \times 15.7$ 、3が $41 \times 12.5 \times 14.7$ 、4が $30.5 \times 0.92 \times 14.5$ 、5は長さ（推定） $40 \times$ 幅 $16.7 \sim 14.5 \times$ 厚さ 0.35 （単位mm）となっている。



第40図 塊状耳飾

第2節 繩文時代以降の遺物

縄文時代以降の遺物はわずか17点である。主なものを第41図に示した。その内訳は、中世の土器が13点でもっとも多く、埴輪1点（3）、キセルの吸い口1点（5）、鉛玉1点（6）、時期不明の銅鏡1点であった。3の埴輪は欠損しており、内外面に付着物が多くみられる。6は中実である。これらの遺物は5を除いて遺構外の出土である。5も2号住居址出土ではあるが、これにともなうものでないことは明らかである（15ページ参照）。



第41図 縄文時代以降の遺物

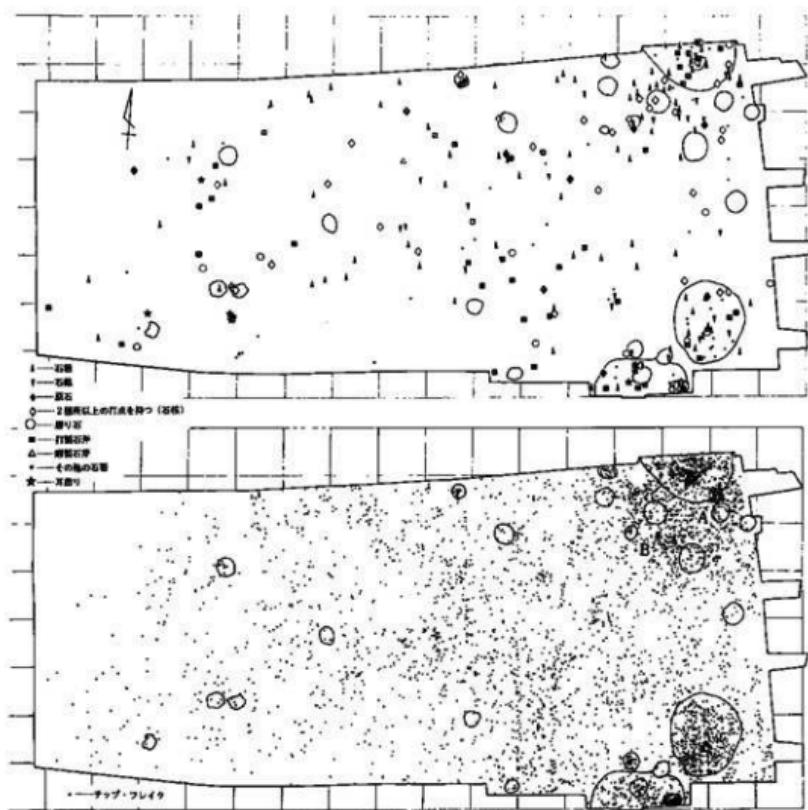
第4章 調査の成果と課題

本遺跡で検出された遺構は住居址3基、土坑23基、出土した遺物は縄文時代早期末～前期前半の土器約130点、中期初頭の土器約4900点、玦状耳飾り5点、黒曜石チップ約4000点、フレイク約1700点、黒曜石製石器（ユーストフレイク・不定形石器を含む）380点、黒曜石原石9点、黒曜石核（2箇所以上の打点を持つ）35点、打製石斧45点、磨り石10点、非黒曜石剥片66点、縄文時代以降の遺物17点であった。住居址3基をはじめ遺構のほとんどは縄文時代中期初頭に属するものである。当期の集落が存在したものと考えられる。

中期初頭の土器について 前期終末から中期初頭の土器については山口明氏、今村啓爾氏、三上徹也氏らによる最近の研究があるが、編年にしても未だ不明瞭な部分が多いというのが実情であろう。その大きな原因は今村氏も述べているように「層位的所見がわずかしか知られていない。従ってその編年の組立は、主として型式学的方法によらなければならない。」ことにあろう。本遺跡出土の土器群は、やはり層位的に明確な答えを出し得るものではないが、編年等の問題解決の一助とはなり得る。

中期初頭の土器群は多くの研究者が認めるように、半截竹管による平行沈線文を多用する所謂集合沈線文系の土器群と、地文に縄文や細線文を用いる土器群とに2大分される。小坂遺跡の土器群もこの2者に分けて整理してみたが、明確な区分が難しいものが多く存在した。おそらく時間的な流れの中で、両者が影響し合った結果であろう。このような状況下で編年的な流れを追ってみると、集合沈線文系の土器は、非常に大雑把ではあるが3段階に分けられそうである。第1段階は第27図17のようにソーメン状の貼り付けを残すもので、全体的なつくりが丁寧なものである。器形も大きな波状口縁が見られる。第2段階は第12図1のように、施文がやや雑になり口縁部等の文様が簡略化されていく段階である。器形は一度開いて内側にくの字状に強く屈曲し、口縁部が再度開く特徴的なものが多い。本遺跡ではこの段階のものが最も多い。第3の段階は第18図12や第35図126のように口縁部の文様帯が退化し、沈線も浅く雑に施される段階である。文様帯との関連で器形もややルーズな感じになる。第2の段階と第3の段階の間には落差があるかもしれない。一方、縄文・細線文系の土器群の多くは、山口氏の言うところの第1・2段階位まで、今村氏の言う五領ヶ台I式を中心としてIIa式期位まで、三上氏の言うI～IIa段階位に属すると思われる。ただし、細線文を使用する土器は少なく縄文を施すものが多い。これが時期差を表すものなのか地域差を表すもののかは即断しがたい。これら2系統の土器群が時間的・空間的にどのような関わりあいで存在したか、またどのような出自であるのかなど、さらに追求しなければならない問題点である。以上たいへん大雑把に中期初頭の土器について述べたが、紙数に制限もあり詳細は他の機会に譲ることとしたい。

搬入品と思われる土器について 第31図13～15、第28図41は胎土・色調・形態等、明らかに他とは異なる様相を示している。搬入品であると思われる。前期末～中期初頭に西日本で盛行した土器群に似た様相である。41と42は伴出していることから、やはり時期的に近い中期初頭のものであろう。中道町上の平遺跡などからも同様の土器が出土している。



第42図 石器器種別出土状況

黒曜石について 小坂遺跡から出土した黒曜石は合計約9500gであった。石器のみの重量はわずか200gほどにすぎないので、ほとんどが廃棄された黒曜石ということになる。数的には少ないが、原石や石核類の中には100gを超えるものもあった。これらの分布を第42図に示した（記号は凡例とは多少変えている）。まず気付くことは、チップ・フレイク類の集中的な分布状況である。住居址内に多く分布するが、それ以上に7号土坑・15号土坑に集中する。さらに、遺構とは重ならない部分でも集中が見られる。しかし、これを石器の分布（上図）と重ねあわせてみると、15号土坑を除いてその整合性は少ないと言わざるを得ない。また、原石・石核（2箇所以上の打点を持つもの）との整合性も薄い。このことは石器製作に関わって、不用となった黒曜石片を意図的にまとめて廃棄する行為があったことを想定される。このことは15号土坑の遺物垂直分布図（第24図）をみても首肯できる。B地点（遺構外の集中地点）でも、

フレイク・チップ類のみがブロック状に出土しており、その地点で製作があったと考えるよりも、廃棄の結果と考えるほうがよいような出土状況である。これは、単に石器製作の問題だけでなく、集落内の空間の利用法や、遺構の性格・廃棄とも関わる問題である。例えば、チップ類の出土が少なく石器類の多い8号土坑と上記の15号土坑とでは、作られた目的もその後の経過・破棄のされ方も違うと考えられる。おそらく、墓坑的性格の強い8号土坑に比べ、15号土坑や7号土坑は、穴が開いていることに意味のある土坑であったのだろう。

次に原石・石核類について見てみたい。集落内から出土する原石については、土坑内や住居址内に意図的に数点～数十点まとめておいたと思われるものが何例か報告・研究されている（長崎1984、金山1988他）。本遺跡ではこのようなまとまった発見はなかったが、図示したようにかなりの点数が出土している。最も大きいもので125.3gで数面の剥離面が残っている。剥離面のはっきりしない原石と考えられるもので大きいものは93g、75.2g等があるが、多くは20～30g近辺のものである。剥離面を残す石核では10～15gほどのものが多数をしめる。本遺跡に持ち込まれたときの大きさは、20～30gのものが多かったのであろう。またその時の形態はどこかで割られたものではなく、原石であった場合が多かったと考えられる。これらの产地と考えられる和田岬周辺まで本遺跡から直線距離で50kmであるが、どのような入手経路であったのか考えさせられるとこどである。出土した黒曜石の総重量が9.5kgを超える数字は、調査面積から考えると決して少ない数ではない。金山氏の言うような黒曜石流通の経路にのっている遺跡であった可能性は十分あろう。今後、当期の周辺集落との比較のなかで、考えていきたい問題である。

玦状耳飾りの出土について 玳瑁状耳飾りの出土については前述したが、出土状況について詳しく述べたい。3-Gグリッドから集中的に出土した4点の耳飾りは接合して2点になった。この地点からは第33図66と第35図113の土器も出土しており（いずれの遺物もローム面からは約5～10cmほど浮いていた）、即断はできないが耳飾りの時期も中期初頭のもの可能性が高い。これに直接関わるような遺構は検出できなかったが、特殊な場であった可能性も十分考えられる。

主要参考文献

- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」 東京大学文学部考古学研究室研究紀要4
金山喜昭 1988 「文化財としての黒曜石」 月刊文化財7
長崎元廣 1984 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」 『中部高地の考古学』Ⅲ
三上徹也 1987 「梨久保式土器 再考」 長野県埋蔵文化財センター紀要1
山口 明 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」 『縄文土器の交流とその背景』 静岡県考古学会シンポジウム4
山田昌久 1985 「縄文時代における石器研究序説」 『論集 日本原史』
山本典幸 1988 「五領ヶ台式土器様式」 『縄文土器大観』3

図版



← A区発掘区



↓ B区発掘区



← 作菜風景



↓ 1号住居址周辺

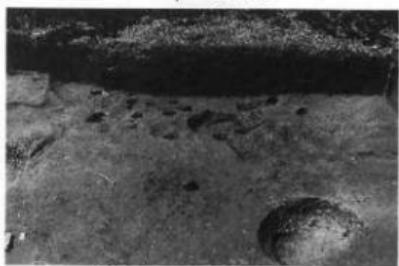


← 作業風景

↓ 1号住居址



← 1号住居址 炉付近





← 2号住居址

↓ 2号住居址·遗物出土状态



← 3号住居址

↓ 3号住居址·埋甕炉



← 3号住居址·遗物出土状态

↓ 1号土坑



← 3号土坑



← 7号土坑セクション



↓ 8号土坑



← 14号土坑



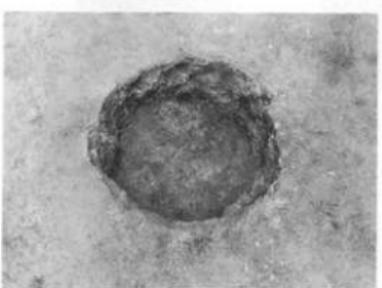
↓ 15号土坑セクション



← 20号土坑



↓ 22号土坑遺物出土状態



← 23号土坑



2号住居址出土土器



2号住居址出土土器



3号住居址出土土器

3号住居址出土土器



8号土坑出土土器



グリット出土土器



グリット出土土器



グリット出土土器



グリット出土土器



1号住居址出土土器



1号住居址出土土器



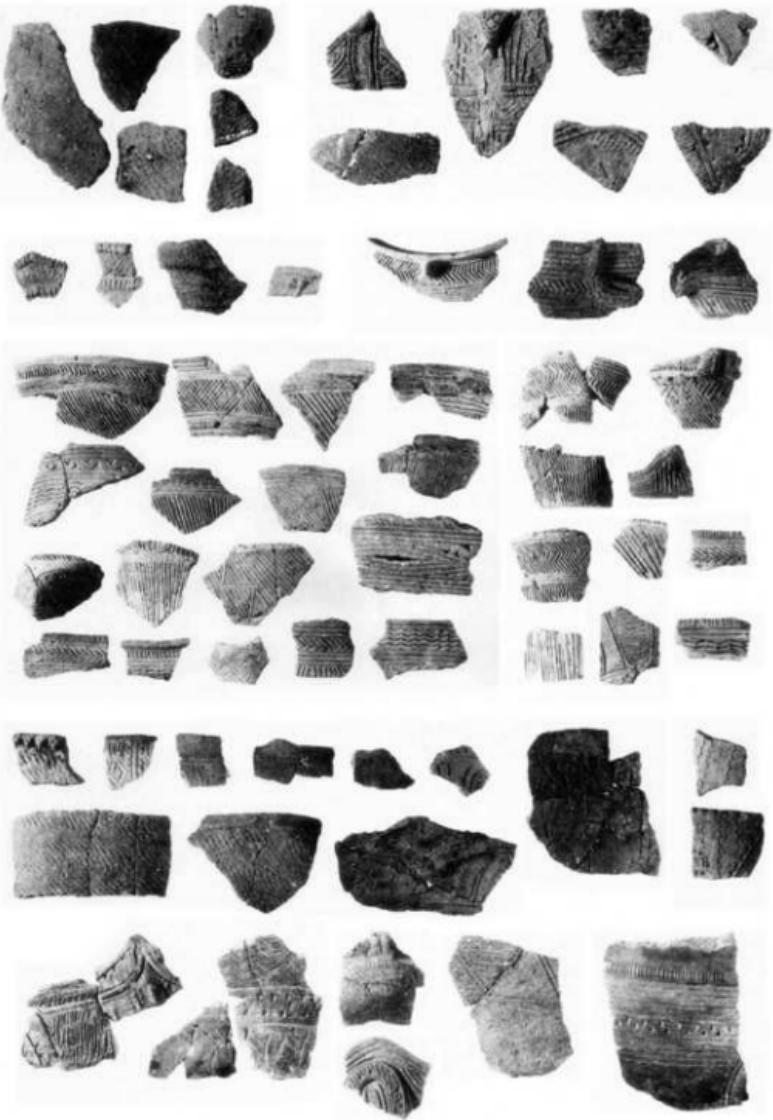
← 2号住居址出土土器



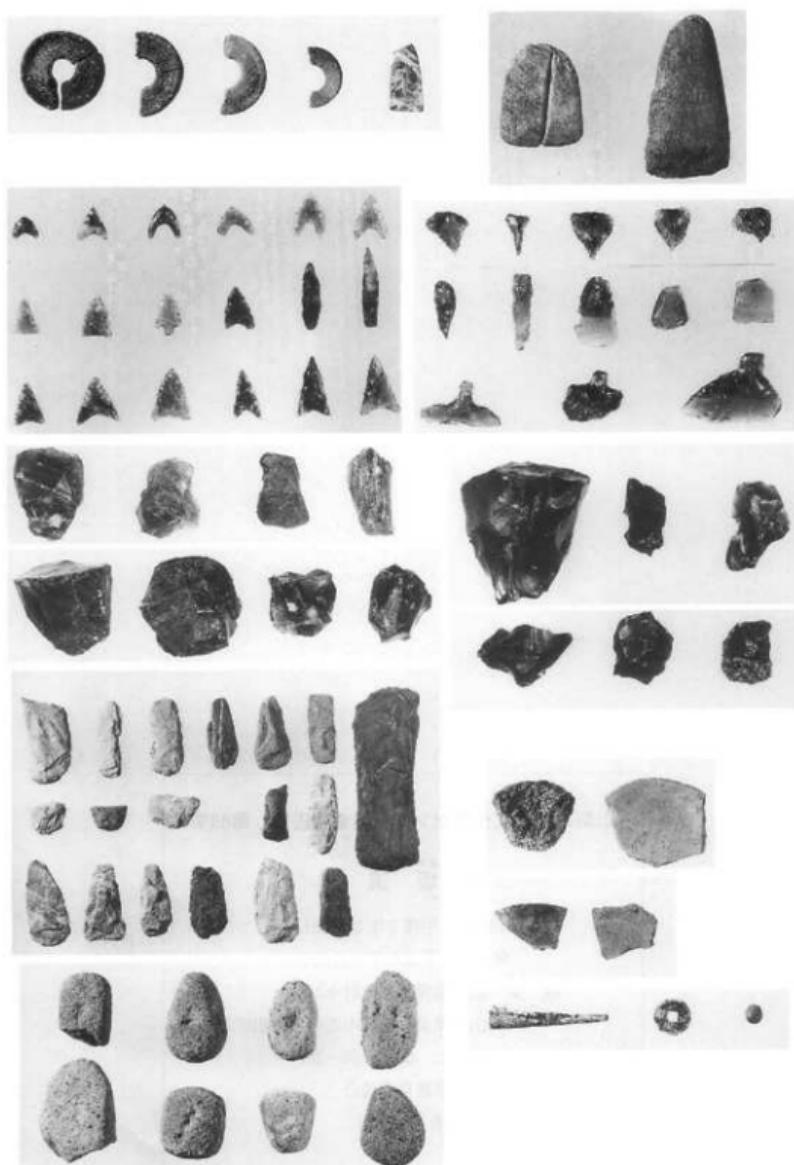
3号住居址出土土器



← 土坑出土土器



グリット出土土器



玦狀耳飾・石器類・中近世遺物

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第63集

小坂遺跡

印刷日 平成3年3月25日

発行日 平成3年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

T E L 0552-66-3881

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 傅緯南堂印刷所

